

日 本 国 特 許 庁  
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office

出 願 年 月 日

Date of Application:

2001年 1月22日

出 願 番 号

Application Number:

特願2001-013894

出 願 人

Applicant(s):

市光工業株式会社

JC887 U.S. PTO  
10/051369  
01/22/02

2001年12月14日

特 許 庁 長 官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

及 川 耕 造

出証番号 出証特2001-3109260

【書類名】 特許願

【整理番号】 IKI-248

【提出日】 平成13年 1月22日

【あて先】 特許庁長官殿

【国際特許分類】 B60Q 1/04

【発明の名称】 車両用前照灯

【請求項の数】 6

【発明者】

【住所又は居所】 神奈川県伊勢原市板戸 8 0 番地 市光工業株式会社 伊勢原製造所内

【氏名】 中田 豊

【特許出願人】

【識別番号】 000000136

【氏名又は名称】 市光工業株式会社

【代表者】 持丸 守

【代理人】

【識別番号】 100083806

【弁理士】

【氏名又は名称】 三好 秀和

【電話番号】 03-3504-3075

【選任した代理人】

【識別番号】 100068342

【弁理士】

【氏名又は名称】 三好 保男

【選任した代理人】

【識別番号】 100100712

【弁理士】

【氏名又は名称】 岩▲崎▼ 幸邦

【選任した代理人】

【識別番号】 100087365

【弁理士】

【氏名又は名称】 栗原 彰

【選任した代理人】

【識別番号】 100079946

【弁理士】

【氏名又は名称】 横屋 赳夫

【選任した代理人】

【識別番号】 100100929

【弁理士】

【氏名又は名称】 川又 澄雄

【選任した代理人】

【識別番号】 100095500

【弁理士】

【氏名又は名称】 伊藤 正和

【選任した代理人】

【識別番号】 100101247

【弁理士】

【氏名又は名称】 高橋 俊一

【選任した代理人】

【識別番号】 100098327

【弁理士】

【氏名又は名称】 高松 俊雄

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 001982

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9709413

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 車両用前照灯

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 光源と、反射面が自由曲面のリフレクタと、プリズムのないレンズとから成り、リフレクタによる反射光がレンズを通過して所定の配光パターンで外部に照射される車両用前照灯であって、

前記レンズは、縦断面が凸形状で、横断面が平形状であることを特徴とする車両用前照灯。

【請求項 2】 請求項 1 記載の車両用前照灯であって、

リフレクタの反射面は、縦断面がレンズより小さい略双曲面で、横断面がレンズと略同サイズの略放物面であることを特徴とする車両用前照灯。

【請求項 3】 光源と、反射面が自由曲面のリフレクタと、プリズムのないレンズとから成り、リフレクタによる反射光がレンズを通過して所定の配光パターンで外部に照射される車両用前照灯であって、

前記レンズは、縦断面が平形状で、横断面が凸形状であることを特徴とする車両用前照灯。

【請求項 4】 請求項 3 記載の車両用前照灯であって、

リフレクタの反射面は、縦断面がレンズと略同サイズの略放物面で、横断面がレンズより小さい略双曲面であることを特徴とする車両用前照灯。

【請求項 5】 請求項 1 ～ 4 のいずれか 1 項に記載の車両用前照灯であって

リフレクタの反射面に形成されている自由曲面が、NURBS (Non-Uniform Rational B-Spline Surface) であることを特徴とする車両用前照灯。

【請求項 6】 請求項 1 ～ 5 のいずれか 1 項に記載の車両用前照灯であって

レンズにおける表面及び裏面の少なくともいずれか一方に、トーラス曲面又は自由曲面が形成されていることを特徴とする車両用前照灯。

【発明の詳細な説明】

【 0 0 0 1 】

## 【発明の属する技術分野】

この発明は、レンズに配光用のプリズムを形成せずに、リフレクタの反射面を自由曲面にして、リフレクタ側に配光機能をもたせた車両用前照灯に関するものである。

## 【0002】

## 【従来の技術】

車両の前照灯は、配光機能をどこにもたせるかによって3つのタイプに分けることができる。第1は、プロジェクタータイプで、楕円リフレクタの第一焦点に光源をおき、第二焦点に配光用のシェードを配置している。第2は、レンズ配光タイプで、レンズに配光用のプリズムを形成し、リフレクタは、単なる放物面になっている。第3は、リフレクタ配光タイプで、レンズには、配光用のプリズムを形成しない単なる素通しの平レンズを用い、その代わりに、リフレクタの反射面を自由曲面にして、リフレクタに配光機能をもたせている。特に、この第3のリフレクタ配光タイプとしては、図30乃至図33に示すものがある。

## 【0003】

即ち、図30において、符号12は光源である。この光源12は、シングルフィラメント又はダブルフィラメントのハロゲンランプ、白熱灯、放電灯等（所謂H1、H3、H4、H7、H11等）を使用する。この光源12は、灯室20内に配置されている。

## 【0004】

図30において、符号13はリフレクタである。このリフレクタ13は、自由曲面の反射面が複合的に組み合わせられてなる。このリフレクタ13の反射面14は、アルミ蒸着や銀色塗装等により、金属の高輝度感を呈する。また、この例におけるリフレクタ13は、図31に示すように、縦に6個に分割されている。この6個に分割された反射面ブロック（又は反射面セグメント）21、22、23、24、25、26（21～26）の境界線（継ぎ目）は、図示のように反射面ブロック21～26が独立して見えるものと、反射面ブロック21から26が連続して見えないものがある。また、このリフレクタ13においては、反射面ブロックを縦方向に分割したものであるが、横方向に分割したもの、放射方向に分

割したもの、縦方向・横方向・放射方向を適宜に組み合わせたものであっても良い。即ち、デザインを考慮してリフレクタ 1 3 の反射面ブロックを分割する。

【 0 0 0 5 】

前記自由曲面からなるリフレクタ 1 3 の詳細については、例えば、「Mathematical Elements for Computer Graphics」 (Devid F. Rogers, J Alan Adams) に記載されている。即ち、平レンズ 1 5 を使用した場合における前記リフレクタ 1 3 の反射面 1 4 は、下記数 1 の一般式で求められる。

【 0 0 0 6 】

そして、下記数 1 の一般式のパラメトリック関数として、下記数 2 に示す。この下記数 2 のパラメトリック関数に、具体的な数値、例えば、放物面上のポイント等を代入することにより、レンズ 1 5 を使用した場合におけるリフレクタ 1 3 の具体的な反射面 1 4 が得られる。

【 0 0 0 7 】

【数 1】

$$P(u, v) = \sum_{j=0}^I \sum_{k=0}^I P_{j,k} N_{j,k}(u) M_{k,l}(v)$$

【 0 0 0 8 】

【数 2】

$$N_{j, i}(u) = \begin{cases} 1 & (\text{もし } u_j \leq u < u_{j+1}) \\ 0 & (\text{それ以外}) \end{cases}$$

$$N_{j, s}(u) = \frac{u - u_j}{u_{j+1} - u_j} N_{j, i}(u) + \frac{u_{j+1} - u}{u_{j+1} - u_{j+2}} N_{j+1, i}(u)$$

$$M_{k, i}(v) = \begin{cases} 1 & (\text{もし } v_k \leq v < v_{k+1}) \\ 0 & (\text{それ以外}) \end{cases}$$

$$M_{k, i}(v) = \frac{v - v_k}{v_{k+1} - v_k} M_{k, i}(v) + \frac{v_{k+1} - v}{v_{k+1} - v_{k+2}} M_{k+1, i}(v)$$

【0009】

このリフレクタ13の焦点Fにおいては、厳密な意味での単一の焦点を有していないが、複数の反射面14相互の焦点距離の差異が僅少であり、ほぼ同一の焦点を共有しているので、このほぼ同一の焦点を本明細書においては疑似焦点（又はただ単に焦点）と言う。同様に、このリフレクタ13の光軸Z-Zにおいては、厳密な意味での単一の光軸を有していないが、複数の光軸の差異が僅少であり、ほぼ同一の光軸を共有しているので、このほぼ同一の光軸を本明細書及び本図面においては疑似光軸（又はただ単に光軸）Z-Zと呼ぶことにする。なお、前記リフレクタ13は、ランプハウジングと別体のものであっても良い。

【0010】

図30において、符号15はレンズである。該レンズ15は、外面と内面とがほぼ平行をなす平レンズ、所謂素通しのレンズ（本明細書においては、平レンズと称する）である。なお、この平レンズ15の外面、内面は、平面でも曲面でも良い。この平レンズ15と前記リフレクタ13とにより、前記灯室20が画成される。



## 【 0 0 1 1 】

前記光源 1 2 を点灯すると、該光源 1 2 からの光 L 1 が、リフレクタ 1 3 で反射され、その反射光 L 2 が平レンズ 1 5 を経て、出射光 L 3 として外部に所定の配光パターンで照射される。ここで、所定の配光パターンとは、欧州配光規格 E C E Reg.、或いはそれに準じたもの（例えば、日本国内型式認定基準）、北米配光規格、F M V S S などの配光規格に適合する配光パターンをいう。そして、図 3 2 に示すように、この所定の配光パターンは、ロービームの配光パターンである。この図示のロービームの配光パターンは、左側通行区分のものであり、右側通行区分のロービームの配光パターンは、この図示のロービームの配光パターンと左右逆になる。

## 【 0 0 1 2 】

図 3 2 に示す所定のロービームの配光パターンは、リフレクタ 1 3 の反射面 1 4 の各反射面ブロック 2 1 ~ 2 6 で制御される。即ち、図 3 1 に示すリフレクタ 1 3 の反射面 1 4 のうち、左から 1 番目の反射面ブロック 2 1 においては、図 3 3 (A) に示す配光パターンが、左から 2 番目の反射面ブロック 2 2 においては、図 3 3 (B) に示す配光パターンが、左から 3 番目の反射面ブロック 2 3 においては、図 3 3 (C) に示す配光パターンが、左から 4 番目の反射面ブロック 2 4 においては、図 3 3 (D) に示す配光パターンが、左から 5 番目の反射面ブロック 2 5 においては、図 3 3 (E) に示す配光パターンが、左から 6 番目の反射面ブロック 2 6 においては、図 3 3 (F) に示す配光パターンが、それぞれ制御されて得られ、この各反射面ブロック 2 1 ~ 2 6 により制御されて得られた配光パターン（図 3 3 (A) 乃至 (F)）を合成することにより、図 3 2 の所定のロービームの配光パターンが得られることとなる。尚、図 3 2 に示す所定のロービームの配光パターン以外にも、ハイビーム用の光源（図示せず）及びリフレクタ 3 により、図示しない所定のハイビームの配光パターンが得られる。

## 【 0 0 1 3 】

## 【発明が解決しようとする課題】

しかしながら、このようなリフレクタ配光タイプの前照灯にあっては、リフレクタ 1 3 の反射面 1 4 を特殊な自由曲面にすることにより、どのような配光パタ

ーンでも生成可能である反面、レンズ 1 5 には、プリズムのない素通しの平レンズを使うため、外部から前照灯の内部のリフレクタ 1 3 がハッキリと見えてしまう。そのため、リフレクタ 1 3 の反射面 1 4 の表面の仕上げ加工としては、反射に必要な光学性能以上に、見た目においても綺麗になるように入念に行う必要があり、作業自体が大変に煩雑なものになっている。

## 【 0 0 1 4 】

また、リフレクタ配光タイプの場合は、リフレクタ 1 3 側に配光機能をもたせているため、レンズ 1 5 の形状に配光上の制約がなく、自由な形状が採用できる。つまり、どのようなレンズ 1 5 の形状を採用しても、その形状に応じてリフレクタ 1 3 側の反射面 1 4 を設計すれば良いため、レンズ 1 5 の形状の自由度が高いことになる。そのため、レンズ 1 5 の形状を自由に変更することにより、新たな機能を有する前照灯が得られる可能性が高くなり、その具体的な構造の提案が待たれている。

## 【 0 0 1 5 】

この発明は、このような従来の技術に着目してなされたものであり、レンズ形状を変更することにより、内部をある程度見づらくすると共に新たな機能を有する車両用前照灯を提供するものである。

## 【 0 0 1 6 】

## 【課題を解決するための手段】

請求項 1 記載の発明は、光源と、反射面が自由曲面のリフレクタと、プリズムのないレンズとから成り、リフレクタによる反射光がレンズを通過して所定の配光パターンで外部に照射される車両用前照灯であって、前記レンズは、縦断面が凸形状で、横断面が平形状である。

## 【 0 0 1 7 】

請求項 1 記載の発明によれば、レンズの縦断面が凸形状であるため、プリズムが形成されていなくても、レンズにより光が大きく屈折して内部が見づらくなる。従って、従来のように、見映えを考慮して、リフレクタの反射面を光学的な必要性以上に入念に仕上げる必要性がなく、リフレクタの仕上げ作業が簡略になる。

## 【 0 0 1 8 】

また、レンズの縦断面が凸形状で横断面が平形状であるということは、縦ではリフレクタにより拡散された光を光軸に略沿った方向に集光し、横ではリフレクタにより反射された光がそのまま光軸に略沿った方向に通過しながら、光を所定の配光パターンで外部へ照射することができる。従って、縦に長く横に小さい前照灯を得やすく、前照灯が組み込まれるフロント部に、十分な横寸法の設置スペースを確保できないような車体デザインの場合に好適である。更に、レンズの横断面が平形状のため、レンズをガラス製にした場合は、レンズの研磨加工が行い易く、レンズの製造性の面で優れている。

## 【 0 0 1 9 】

請求項 2 記載の発明は、リフレクタの反射面が、縦断面は略双曲面で、横断面は略放物面である。

## 【 0 0 2 0 】

請求項 2 記載の発明によれば、リフレクタの反射面が、縦断面では略双曲面のために、光を縦に拡散した状態でレンズに導くことができ、また横断面では略放物面のために、光を光軸に略沿った状態でレンズに導くことができる。従って、縦断面が凸形状で横断面が平形状であるレンズとの組み合わせに最適で、縦に長く横に小さい前照灯を得やすい。

## 【 0 0 2 1 】

請求項 3 記載の発明は、光源と、反射面が自由曲面のリフレクタと、プリズムのないレンズとから成り、リフレクタによる反射光がレンズを通過して所定の配光パターンで外部に照射される車両用前照灯であって、前記レンズは、縦断面が平形状で、横断面が凸形状である。

## 【 0 0 2 2 】

請求項 3 記載の発明によれば、レンズの横断面が凸形状であるため、プリズムが形成されていなくても、レンズにより光が大きく屈折して内部が見づらくなる。従って、従来のように、見映えを考慮して、リフレクタの反射面を光学的な必要性以上に入念に仕上げる必要性がなく、リフレクタの仕上げ作業が簡略になる。

## 【 0 0 2 3 】

また、レンズの縦断面が平形状で横断面が凸形状であるということは、縦ではリフレクタにより反射された光がそのまま光軸に略沿った方向に通過し、横ではリフレクタにより拡散された光を光軸に略沿った方向に集光しながら、光を所定の配光パターンで外部へ照射することができる。従って、縦に小さく横に長い前照灯を得やすく、前照灯が組み込まれるフロント部に、十分な上下寸法の設置スペースを確保できないような車体デザインの場合に好適である。更に、レンズの縦断面が平形状のため、レンズをガラス製にした場合は、レンズの研磨加工が行い易く、レンズの製造性の面で優れている。

## 【 0 0 2 4 】

請求項 4 記載の発明は、リフレクタの反射面が、縦断面は略放物面で、横断面は略双曲面である。

## 【 0 0 2 5 】

請求項 4 記載の発明によれば、リフレクタの反射面が、横断面では略双曲面のために、光を横に拡散した状態でレンズに導くことができ、また縦断面では略放物面のために、光を光軸に略沿った状態でレンズに導くことができる。従って、縦断面が平形状で横断面が凸形状であるレンズとの組み合わせに最適で、横に縦に長く縦に小さい前照灯を得やすい。

## 【 0 0 2 6 】

請求項 5 記載の発明は、リフレクタの反射面に形成されている自由曲面が、NURBS (Non-Uniform Rational B-Spline Surface) である。

## 【 0 0 2 7 】

請求項 5 記載の発明によれば、リフレクタの自由曲面がNURBSのため、コンピュータシミュレートによる配光特性の分析により、理想的な配光パターンをもった前照灯の設計が容易である。

## 【 0 0 2 8 】

請求項 6 記載の発明は、レンズにおける表面及び裏面の少なくともいずれか一方に、トーラス曲面又は自由曲面が形成されている。

## 【 0 0 2 9 】

請求項 6 記載の発明によれば、レンズの表面や裏面にもトーラス曲面又は自由曲面を形成したため、リフレクタだけでなくレンズにも配光機能をもたせることができ、より理想的な配光パターンが得られるようになる。

#### 【 0 0 3 0 】

##### 【発明の実施の形態】

以下、この発明の好適な実施例を図面に基づいて説明する。

#### 【 0 0 3 1 】

この発明の第 1 実施形態を、図 1 ～図 1 4 に基づいて説明する。この実施形態は、車両、例えば自動車の前照灯に関するものであり、該前照灯は、図示せぬランプハウジングの前面にレンズ 1 を備え、内部に光源 2 と、リフレクタ 3 を設けた構造になっている。尚、S は光軸を示している。

#### 【 0 0 3 2 】

前記レンズ 1 は、図 1 乃至図 4 に示すように、外形が縦長の長方形で、縦断面が凸形状で、横断面が平形状であり、配光のためのプリズムは形成されていない。但し、その表面及び裏面には、配光用の自由曲面である N U R B S (Non-Uniform Rational B-Spline Surface) が形成されている。レンズ 1 は、ガラス製でも、樹脂製でも良いが、この実施形態では、ガラスで形成している。レンズ 1 をこのようにガラス製にした場合は、レンズ 1 の横断面が前述のように平形状のため、レンズ 1 の研磨加工が行い易く、レンズ 1 の製造性の面で優れている。

#### 【 0 0 3 3 】

前記光源 2 は、前記光源 1 2 同様に、シングルフィラメント又はダブルフィラメントのハロゲンランプ、白熱灯、放電灯等（所謂、H 1、H 3、H 4、H 7、H 1 1 等）を使用する。

#### 【 0 0 3 4 】

前記リフレクタ 3 の反射面 4 は、アルミ蒸着や銀色塗装等により、金属の高輝度感を呈している。リフレクタ 3 は、ランプハウジングと一体でも別体でも良い。リフレクタ 3 は、レンズ 1 よりも小さく、縦断面及び横断面とも略楕円面である。そして、この反射面 4 は、図 6 (a) に示すように、横に 6 個に分割されている。この 6 個に分割された反射面ブロック（若しくは反射面セグメント）2 1

、22、23、24、25、26（21～26）の境界線（繋ぎ目）は、図示のように反射面ブロック21～26が独立して見えるものと、反射面ブロック21～26が連続して見えないものがある。

## 【0035】

図7は、本発明の前照灯におけるリフレクタ3の製造方法の一実施形態を示したフローチャートであり、以下詳細に説明する。

## 【0036】

まず、①において、マイクロコンピュータ（図示せず）にデータを入力する。このデータは、例えば、データベースの設計仕様等から、前照灯自体のデザイン及び前照灯を搭載する自動車のデザインを考慮して選定される。このデータとしては、光源2の種類、リフレクタの大きさ及び表面形状、リフレクタの反射面ブロックの分割、平レンズ15の大きさ及び表面形状並びに裏面形状、目標配光パターン等々である。

## 【0037】

次に、②において、前記①で入力されたデータに基づいて、平レンズ15との組み合わせにより、目標配光パターン（図32、図33）が得られるように、リフレクタを仮設定する処理が行われる。この仮設定リフレクタは、NURBSの自由曲面におけるコントロールポイント、法線ベクトル等に基づいて自動的に設定される。

## 【0038】

続いて、③において、前記②の処理により得られた仮設定リフレクタをそのまま変えずに、平レンズ15を縦断面が凸状、横断面が平状のレンズ1に変える処理が行われる。この時に、レイトレーシング手法により、モデル化された光源2からの光L1がリフレクタの反射面で反射し、その反射光がレンズで屈折されて、その後出射光として前方のスクリーン（図示せず）上に到達して作られるイメージの配光パターン（図示省略）が計算して得られる。

## 【0039】

④において、前記②の処理により得られる目標配光パターン（図32）と、前記③の処理により得られる配光パターンとのずれを算出する処理が行われる。こ

のずれは、レンズ1における光の屈折により生じるものである。

【0040】

⑤及び⑥において、前記④の処理により算出されたずれが0となるように、仮設定リフレクタをレンズ1用のリフレクタ3に本設定する処理が行われる。即ち、前記③の処理により得られる配光パターンが前記②の処理により得られる目標配光パターン（図32）となるように、リフレクタのNURBSの自由曲面を自動的に修正変形して最適なNURBSの自由曲面を形成するものである。この⑤及び⑥の処理は、レイトレーシング手法により、光源1からの光L1がリフレクタで反射し、その反射光がレンズで屈折され、その後出射光として前方のスクリーン（図示せず）上に到達する、光線追跡計算を繰り返すものである。

【0041】

そして、前記ずれがほぼ0になったところで、レンズ1用のリフレクタ3が本設定されたことになり、⑦において、本設定されたリフレクタ3が出力される。

【0042】

このように、この実施形態における本発明の製造方法は、内部の金属の高輝度感が失われずに、内部をある程度見難くし、且つ光学設計上の自由度が大である前照灯におけるリフレクタ3を製造することが出来る。しかも、前記②、③、④、⑤、⑥の処理、即ち、リフレクタ3の仮設定工程、ずれ算出工程、リフレクタの本設定工程を、コンピュータで所定のプログラムに従って処理することにより、前記前照灯におけるリフレクタ3を高精度、高速度、高自由度に製造することができる。

【0043】

次に、本発明のレンズ1を有する前照灯と、従来の平レンズ15を有する前照灯との光学設計シュミレーションを試行した結果について詳細に説明する。図5は、光学設計シュミレーションに入力するデータを示した説明図である。この図5におけるデータ寸法は、それぞれ以下の通りである。

$Ar = 120\text{ mm}$ （リフレクタ3の横寸法）

$Br = 80\text{ mm}$ （リフレクタ3の縦寸法）

$Al = 120\text{ mm}$ （レンズ1の横寸法）

$B1 = 120\text{mm}$  (レンズ1の縦寸法)

$T = 20\text{mm}$  (レンズ1 (光軸Z-Zにおける) 肉厚寸法)

$Sv = 0^\circ$  (レンズ1 (光軸Z-Zにおける) 側面傾斜角度)

$Sh = 0^\circ$  (レンズ1 (光軸Z-Zにおける) 平面傾斜角度)

$Rvo = 1400\text{mm}$  (レンズ1の表面の側面光軸Z-Zにおける曲率半径)

$Rho = 1400\text{mm}$  (レンズ1の表面の平面光軸Z-Zにおける曲率半径)

$Rvi = 130\text{mm}$  (レンズ1の裏面の側面光軸Z-Zにおける曲率半径)

$Rhi = 1400\text{mm}$  (レンズ1の裏面の平面光軸Z-Zにおける曲率半径)

$F = 22\text{mm}$  (焦点距離)

$Lf = 4.6\text{mm}$  (光源2のフィラメントの長さ)

$Rf = 0.73\text{mm}$  (光源2のフィラメントの半径)

【0044】

前記データを下記の表1の値に入力する。尚、条件としては、欧州配光規格E  
CEReg. を満足し、リフレクタ3の大きさと光源2は同じものとする。

【0045】

【表1】

リフレクタ3		
横 幅	縦 幅	焦 点 距 離
$Ar(\text{mm})$	$Br(\text{mm})$	$F(\text{mm})$
120	80	22

【0046】

かかる前照灯の光源2を点灯すると、下記の表2の結果が得られる。

【0047】



【表 2】

欧州配光規格		満 足
最大光度 (c d)		22380
利用光度 (l m)		404
レンズの発 光部  (mm)	縦	120
	横	120
	肉厚	20

## 【0048】

前記光源 2 を点灯すると、該光源 2 からの光 L 1 がリフレクタ 3 で反射され、その反射光 L 2, L 3 がレンズ 1 を経て、出射光 L 4, L 5 として外部に所定の配光パターンで照射される。該所定の配光パターンとは、欧州配光規格 E C E R eg.、或いはそれに準じたもの（例えば、日本国内型式認定基準）、北米配光規格、FMVSS などの配光規格に適合する配光パターンをいう。そして、図 8 に示すように、この所定の配光パターンは、ロービームの配光パターンである。この図示のロービームの配光パターンは、左側通行区分のものであり、右側通行区分のロービームの配光パターンは、この図示のロービームの配光パターンと左右逆になる。

## 【0049】

図 8 に示す所定のロービームの配光パターンは、リフレクタ 3 の反射面 4 の各反射面ブロック 2 1 ~ 2 6 で制御される。即ち、図 6 (a) に示すリフレクタ 3 の反射面 4 のうち、左から 1 番目の反射面ブロック 2 1 においては、図 9 に示す配光パターンが、左から 2 番目の反射面ブロック 2 2 においては、図 1 0 に示す

配光パターンが、左から 3 番目の反射面ブロック 2 3 においては、図 1 1 に示す配光パターンが、左から 4 番目の反射面ブロック 2 4 においては、図 1 2 に示す配光パターンが、左から 5 番目の反射面ブロック 2 5 においては、図 1 3 に示す配光パターンが、左から 6 番目の反射面ブロック 2 6 においては、図 1 4 に示す配光パターンが、それぞれ制御されて得られ、この各反射面ブロック 2 1 ~ 2 6 により制御されて得られた配光パターン（図 9 乃至図 1 4）を合成することにより、図 8 の所定のロービームの配光パターンが得られることとなる。

## 【 0 0 5 0 】

理論上のリフレクタ 3 の設計では、光源 2 を点光源として作成するが、実際には、図 1、図 2 に明らかなように、フィラメントの長さをもっているので、光源 2 には前後幅を有している。

## 【 0 0 5 1 】

このため、例えば、図 6 (a) に示すように、光源 2 に一番近い反射面ブロック 2 3 におけるリフレクタ 3 の反射面 4 における一ポイント P 1 で、光源 2 の光が反射された際に、光源（フィラメント） 2 の後端 b からの出射光 L 4 は、図 1 に示すように、投影された状態における水平線 S 1 に対して角度  $\theta_1$  分だけ下側に出射され、光源（フィラメント） 2 の前端 a からの出射光 L 5 は、投影された状態における水平線 S 1 に対して角度  $\theta_2$  分だけ下側に出射される。出射された光 L 4, L 5 が、スクリーン（図示せず）上では、図 6 (b) 及び図 1 1 に示すように、略中央部に上下に長尺状であり且つ光源 2 からの左右方向のズレ分だけ少し傾きをもって投影される。前記レンズ 1 から出射される出射光 L 4, L 5 の投影された状態における水平線 S 1 に対しての角度  $\theta_1$ 、 $\theta_2$  は、スクリーン（図示せず）上の水平線 H-H からレンズ 1 からの角度  $\theta_1$ 、 $\theta_2$  と同じ角度で投影されている。

## 【 0 0 5 2 】

また、例えば、図 6 (a) に示すように、光源 2 から最も遠い反射面ブロック 2 1 におけるリフレクタ 3 の反射面 4 における一ポイント P 2 で、光源 2 の光が反射された際に、光源（フィラメント） 2 の後端 b からの出射光 L 4 は、図 2 に示すように、投影された状態における垂直線 S 2 に対して角度  $\theta_3$  分だけ内側に

出射されるが、光源（フィラメント）2の前端aからの出射光L5は、投影された状態における垂直線S2に対して角度 $\theta_4$ 分だけ外側に出射される。出射された光L4、L5が、スクリーン（図示せず）上では、図6（b）及び図9に示すように、略中央部に左右に長尺状に投影される。前記レンズ1から出射される出射光L4、L5の投影された状態における垂直線S2に対しての角度 $\theta_3$ 、 $\theta_4$ は、スクリーン（図示せず）上の垂直線V-Vからレンズ1からの角度 $\theta_3$ 、 $\theta_4$ と同じ角度で投影されている。

## 【0053】

尚、図8に示す所定のロービームの配光パターン以外にも、ハイビーム用の光源（図示せず）及びリフレクタ3により、図示しない所定のハイビームの配光パターンが得られる。

## 【0054】

つまり、前記反射面4に形成された自由曲面は、それによって生成される配光パターンをコンピュータシミュレートして配光特性を分析し、最適な配光パターンになるように形成されたものである。従って、この反射面4による反射光L2、L3がレンズ1を通過して外部に照射される時の出射光L4、L5の配光パターンは、すれ違い、走行パターンともにバランスのとれた最適なものである。しかも、この実施形態では、レンズ1の表面や裏面にも自由曲面（NURBS）を形成したため、リフレクタ3だけでなくレンズ1にも配光機能をもたせることができ、より理想的な配光パターンが得られるようになる。

## 【0055】

そして、特にこの実施形態では、レンズ1の縦断面が凸形状であるため、プリズムが形成されていなくても、外部から見た場合に、レンズ1により光が大きく屈折して内部が見づらくなる。従って、従来のように、見映えを考慮して、リフレクタ3の反射面4を光学的な必要性以上に入念に仕上げる必要性がなく、リフレクタ3の仕上げ作業が容易になる。

## 【0056】

また、レンズ1の縦断面が凸形状で横断面が平形状であるということは、縦では、リフレクタ3の略双曲面により拡散された光を光軸Sに略沿った方向に集光

し、横では、略放物面により反射された光がそのまま光軸 S に略沿った方向に通過しながら、光を所定の配光パターンで外部へ照射することができる。従って、前述のような縦長のレンズ 1 を用いた、縦に長く横に小さい前照灯を形成することができ、前照灯を組み込むべきフロント部に、十分な横寸法の設置スペースを確保できないような車体デザインの場合に好適である。

## 【 0 0 5 7 】

以上のように、レンズ 1 の形状を従来の単なる平形状から、この実施形態のように縦断面は凸形状で、横断面は平形状に変形することにより、現在の多様化した車体デザインの要望に応え得る新たな機能（横寸法の小さい設置スペースにも組み込める機能）を有する前照灯の実現が可能になった。

## 【 0 0 5 8 】

次に、この発明の第 2 実施形態を図 1 5 ～ 図 2 8 に基づいて説明する。この実施形態は、第 1 実施形態と主に異なる点は、レンズが、外形が横長の長方形で、縦断面が平形状で、横断面が凸形状である点であり、他は同一である。

## 【 0 0 5 9 】

即ち、符号 5 はレンズで、該レンズ 5 は、図 1 5 乃至図 1 8 に示すように、外形が横長の長方形で、縦断面が平形状で、横断面が凸形状であり、配光のためのプリズムは、形成されていない。但し、レンズ 5 の表面及び裏面には、配光用の自由曲面である N U R B S (Non-Uniform Rational B-Spline Surface) が形成されている。レンズ 5 は、ガラス製でも、樹脂製でも良いが、この実施形態では、ガラスで形成している。レンズ 5 をこのようにガラス製にした場合は、レンズ 5 の縦断面が前述のように平形状のため、レンズ 5 の研磨加工が行い易く、レンズ 5 の製造性の面で優れている。

## 【 0 0 6 0 】

前記光源 2 は、前記光源 1 2 同様に、シングルフィラメント又はダブルフィラメントのハロゲンランプ、白熱灯、放電灯等（所謂、H 1、H 3、H 4、H 7、H 1 1 等）を使用する。

## 【 0 0 6 1 】

前記リフレクタ 6 の反射面 7 は、アルミ蒸着や銀色塗装等により、金属の高輝

度感を呈している。リフレクタ 6 は、ランプハウジングと一体でも別体でも良い。リフレクタ 6 は、レンズ 5 よりも小さく、縦断面及び横断面とも略楕円面である。そして、この反射面 7 は、図 2 0 (a) に示すように、縦に 5 個分割され、且つ横に一部が分割され、合計 7 個に分割されている。この 7 個に分割された反射面ブロック（若しくは反射面セグメント）2 7, 2 8, 2 9, 3 0, 3 1, 3 2, 3 3（2 7～3 3）の境界線（繋ぎ目）は、図示のように反射面ブロック 2 7～3 3 が独立して見えるものと、反射面ブロック 2 7～3 3 が連続して見えないものがある。

## 【 0 0 6 2 】

リフレクタ 3 の製造方法の実施形態は、前記した第 1 実施形態と同じ為、説明を割愛する。但し、レンズの縦断面が凸形状で、横断面が平形状である点で、異なる。

## 【 0 0 6 3 】

次に、本発明のレンズ 5 を有する前照灯と、従来の平レンズ 1 5 を有する前照灯との光学設計シュミレーションを試行した結果について詳細に説明する。図 1 9 は、光学設計シュミレーションに入力するデータを示した説明図である。この図 1 9 におけるデータ寸法は、それぞれ以下の通りである。

$A r = 100 \text{ mm}$ （リフレクタ 6 の横寸法）

$B r = 100 \text{ mm}$ （リフレクタ 6 の縦寸法）

$A l = 120 \text{ mm}$ （レンズ 5 の横寸法）

$B l = 100 \text{ mm}$ （レンズ 5 の縦寸法）

$T = 28 \text{ mm}$ （レンズ 5（光軸 Z-Z における）肉厚寸法）

$S v = 0^\circ$ （レンズ 5（光軸 Z-Z における）側面傾斜角度）

$S h = 0^\circ$ （レンズ 5（光軸 Z-Z における）平面傾斜角度）

$R v o = 1400 \text{ mm}$ （レンズ 5 の表面の側面光軸 Z-Z における曲率半径）

$R h o = -300 \text{ mm}$ （レンズ 5 の表面の平面光軸 Z-Z における曲率半径）

$R v i = 1400 \text{ mm}$ （レンズ 5 の裏面の側面光軸 Z-Z における曲率半径）

$R h i = 200 \text{ mm}$ （レンズ 5 の裏面の平面光軸 Z-Z における曲率半径）

$F = 18 \text{ mm}$ （焦点距離）

$Lf = 4.6 \text{ mm}$  (光源 2 のフィラメントの長さ)

$Rf = 0.73 \text{ mm}$  (光源 2 のフィラメントの半径)

【0064】

前記データを下記の表 1 の値に入力する。尚、条件としては、欧州配光規格 ECE Reg. を満足し、リフレクタ 6 の大きさと光源 2 は同じものとする。

【0065】

【表 3】

リフレクタ 6		
横 幅	縦 幅	焦 点 距 離
$A_r (\text{mm})$	$B_r (\text{mm})$	$F (\text{mm})$
100	100	18

【0066】

かかる前照灯の光源 2 を点灯すると、下記の表 2 の結果が得られる。

【0067】

【表 4】

欧州配光規格		満 足
最大光度 ( c d )		18000
利用光度 ( l m )		412
レンズの発 光部  ( 単位 )	縦	120
	横	100
	肉厚	28

## 【0068】

前記光源 2 を点灯すると、該光源 2 からの光がリフレクタ 6 で反射され、その反射光 L 2, L 3 がレンズ 5 を経て、出射光 L 4, L 5 として外部に所定の配光パターンで照射される。該所定の配光パターンとは、欧州配光規格 E C E Reg.、或いはそれに準じたもの（例えば、日本国内型式認定基準）、北米配光規格、FMVSS などの配光規格に適合する配光パターンをいう。そして、図 2 1 に示すように、この所定の配光パターンは、ロービームの配光パターンである。この図示のロービームの配光パターンは、左側通行区分のものであり、右側通行区分のロービームの配光パターンは、この図示のロービームの配光パターンと左右逆になる。

## 【0069】

図 2 1 に示す所定のロービームの配光パターンは、リフレクタ 6 の反射面 7 の各反射面ブロック 2 7 ~ 3 3 で制御される。即ち、図 2 0 ( a ) に示すリフレクタ 6 の反射面 7 のうち、左から 1 番目の反射面ブロック 2 7 においては、図 2 2 に示す配光パターンが、左から 2 番目で上側の反射面ブロック 2 8 においては、

図 2 3 に示す配光パターンが、左から 2 番目で下側の反射面ブロック 2 9 においては、図 2 4 に示す配光パターンが、左から 3 番目で上側の反射面ブロック 3 0 においては、図 2 5 に示す配光パターンが、左から 3 番目で下側の反射面ブロック 3 1 においては、図 2 6 に示す配光パターンが、左から 4 番目の反射面ブロック 3 2 においては、図 2 7 に示す配光パターンが、左から 5 番目の反射面ブロック 3 3 においては、図 2 8 に示す配光パターンが、それぞれ制御されて得られ、この各反射面ブロック 2 7 ~ 3 3 により制御されて得られた配光パターン（図 2 2 乃至図 2 8）を合成することにより、図 2 1 の所定のロービームの配光パターンが得られることとなる。尚、前記反射面ブロック 2 8 ~ 3 1 の説明において、上側・下側とは、光源 2 を中心に説明している。

## 【 0 0 7 0 】

理論上のリフレクタ 6 の設計では、光源 2 を点光源として作成するが、実際には図 1 5、図 1 6 に明らかなように、フィラメントの長さをもっているので、光源 2 には、前後幅を有している。

## 【 0 0 7 1 】

このため、例えば、図 2 0 (a) に示すように、光源 2 の真上に位置する反射面ブロック 3 0 におけるリフレクタ 6 の反射面 7 における一ポイント P 1 で、光源 2 の光が反射された際に、光源（フィラメント） 2 の後端 b からの出射光 L 4 は、図 1 5 に示すように、投影された状態における水平線 S 1 に対して角度  $\theta 1$  分だけ下側に出射される。光源（フィラメント） 2 の前端 a からの出射光 L 5 は、投影された状態における水平線 S 1 に対して角度  $\theta 2$  分だけ下側に出射される。前記レンズ 5 から出射された光 L 4、L 5 が、スクリーン（図示せず）上では、図 2 0 (b) 及び図 1 2 に示すように、略中央部に上下に長尺状に投影される。前記レンズ 5 から出射された光 L 4、L 5 の投影された状態における水平線 S 1 に対しての角度  $\theta 1$ 、 $\theta 2$  は、スクリーン（図示せず）上の水平線 H-H からレンズ 1 からの角度  $\theta 1$ 、 $\theta 2$  と同じ角度で投影されている。

## 【 0 0 7 2 】

また、例えば、図 2 0 (a) に示すように、光源 2 から最も遠い反射面ブロック 2 7 におけるリフレクタ 6 の反射面 7 における一ポイント P 2 で、光源 2 の光



が反射された際に、光源（フィラメント）2の後端bからの出射光L4は、図16に示すように、投影された状態における垂直線S2に対して角度 $\theta 3$ 分だけ内側に出射される。光源（フィラメント）2の前端aからの出射光L5は、投影された状態における垂直線S5に対して角度 $\theta 4$ 分だけ外側に出射される。出射された光L4、L5が、スクリーン（図示せず）上では、図20（b）及び図22に示すように、左右に長尺状に投影される。前記レンズ5から出射される出射光L4、L5の投影された状態における垂直線S2に対しての角度 $\theta 3$ 、 $\theta 4$ は、スクリーン（図示せず）上の垂直線V-Vからレンズ1からの角度 $\theta 3$ 、 $\theta 4$ と同じ角度で投影されている。

## 【0073】

尚、図21に示す所定のロービームの配光パターン以外にも、ハイビーム用の光源（図示せず）及びリフレクタ3により、図示しない所定のハイビームの配光パターンが得られる。

## 【0074】

つまり、前記反射面7に形成された自由曲面は、それによって生成される配光パターンをコンピュータシミュレートして配光特性を分析し、最適な配光パターンになるように形成されたものである。従って、この反射面7による反射光L2、L3がレンズ5を通過して外部に照射される時の出射光L4、L5の配光パターンは、すれ違い、走行パターンともにバランスのとれた最適なものである。しかも、この実施形態では、レンズ5の表面や裏面にも自由曲面（NURBS）を形成したため、リフレクタ6だけでなくレンズ5にも配光機能をもたせることができ、より理想的な配光パターンが得られるようになる。

## 【0075】

そして、特にこの実施形態では、レンズ5の横断面が、凸形状であるため、プリズムが形成されていなくても、外部から見た場合に、レンズ5により光が大きく屈折して内部が見づらくなる。従って、従来のように、見映えを考慮して、リフレクタ6の反射面7を光学的な必要性以上に入念に仕上げる必要性がなく、リフレクタ6の仕上げ作業が容易になる。

## 【0076】

また、レンズ5の横断面が、凸形状で、リフレクタ6からの反射光がレンズ5により集光されるため、発光面積は、小さいけど、光量の大きい前照灯が得られる。つまり、リフレクタ6の反射面7がレンズ5よりも小さくても、光源2からの光を広い範囲で集光してレンズ5側に反射することができ、レンズ5から照射される光量を増加させることができる。このように、小さくて明るい前照灯を形成することができるため、前照灯を組み込むべきフロント部に大きな設置スペースを確保できないような車体デザインの場合に好適である。

## 【0077】

以上のように、レンズ5の形状を従来の単なる平形状から、この実施形態のように横断面が凸形状に変形することにより、現在の多様化した車体デザインの要望に応えうる新たな機能（狭い設置スペースにも組み込める機能）を有する前照灯の実現が可能になった。

## 【0078】

尚、以上二つの実施形態において、レンズ1、5の縦断面及び横断面の何れかを「凸形状」にしたが、各断面における「凸形状」とは、レンズ1、5がその断面において、入射光を光軸Sから収束する方向に屈折させる光学的機能を有する形状のことを意味している。従って、図29（a）のように片面だけが凸面になっているものや、図29（b）のように一方が凹面で他方がそれ以上の凸面になっているものや、図29（c）のように光軸Sに対して斜めになっているものも、本願発明の「凸形状」に含まれる。

## 【0079】

## 【発明の効果】

この発明によれば、レンズの縦断面又は横断面が凸形状であるため、プリズムが形成されていなくても、レンズにより光が大きく屈折して内部が見づらくなる。従って、従来のように、見映えを考慮して、リフレクタの反射面を光学的な必要性以上に入念に仕上げる必要性がなく、リフレクタの仕上げ作業が簡略になる。また、縦に長く横に小さい前照灯、或いは縦に小さく横に長いのが得られるため、前照灯が組み込まれるフロント部に、十分な横寸法や上下寸法の設置スペースを確保できないような車体デザインの場合に好適である。更に、レンズの横断面

又は縦断面が平形状のため、レンズをガラス製にした場合は、レンズの研磨加工が行い易く、レンズの製造性の面で優れている。

【図面の簡単な説明】

【図 1】

この発明の第 1 実施形態に係る前照灯の縦断面図。

【図 2】

図 1 の前照灯の横断面図。

【図 3】

図 1 の前照灯の正面図。

【図 4】

図 1 のレンズの斜視図。

【図 5】

この発明の第 1 実施形態に係る光学シミュレーションに入力するデータを示した説明図であって、(A) は正面図、(B) は (A) における B-B 線断面図、(C) は (A) における C-C 線断面図、(D) は (C) における D 部の拡大図。

【図 6】

(a) は、図 1 のリフレクタの反射面の正面図、(b) はスクリーンに投影されるピンポイントにおける代表的な配光パターン図。

【図 7】

本発明の前照灯におけるリフレクタの製造方法の一実施形態を示したフローチャート。

【図 8】

図 1、2 の前照灯による所定のロービームの配光パターン図（等照度曲線図）。

【図 9】

図 1、2 に示すレンズ 1 と図 6 (a) に示すリフレクタ 3 の反射面 4 の反射面ブロック 2 1 とにより得られる配光パターンであって、コンピュータのシミュレーションで得られた配光パターンを簡略化した配光パターンの説明図。

【図 1 0】

図 1、2 に示すレンズ 1 と図 6 (a) に示すリフレクタ 3 の反射面 4 の反射面ブロック 2 2 とにより得られる配光パターンであって、コンピュータのシミュレーションで得られた配光パターンを簡略化した配光パターンの説明図。

【図 1 1】

図 1、2 に示すレンズ 1 と図 6 (a) に示すリフレクタ 3 の反射面 4 の反射面ブロック 2 3 とにより得られる配光パターンであって、コンピュータのシミュレーションで得られた配光パターンを簡略化した配光パターンの説明図。

【図 1 2】

図 1、2 に示すレンズ 1 と図 6 (a) に示すリフレクタ 3 の反射面 4 の反射面ブロック 2 4 とにより得られる配光パターンであって、コンピュータのシミュレーションで得られた配光パターンを簡略化した配光パターンの説明図。

【図 1 3】

図 1、2 に示すレンズ 1 と図 6 (a) に示すリフレクタ 3 の反射面 4 の反射面ブロック 2 5 とにより得られる配光パターンであって、コンピュータのシミュレーションで得られた配光パターンを簡略化した配光パターンの説明図。

【図 1 4】

図 1、2 に示すレンズ 1 と図 6 (a) に示すリフレクタ 3 の反射面 4 の反射面ブロック 2 6 とにより得られる配光パターンであって、コンピュータのシミュレーションで得られた配光パターンを簡略化した配光パターンの説明図。

【図 1 5】

この発明の第 2 実施形態に係る前照灯の縦断面図。

【図 1 6】

図 1 5 の前照灯の横断面図。

【図 1 7】

図 1 5 の前照灯の正面図。

【図 1 8】

図 1 5 のレンズの斜視図。

【図 1 9】

この発明の第 2 実施形態に係る光学シミュレーションに入力するデータを示した説明図であって、(A) は正面図、(B) は (A) における B-B 線断面図、(C) は (A) における C-C 線断面図、(D) は (C) における D 部の拡大図。

【図 2 0】

(a) は、図 1 5 のリフレクタの反射面の正面図、(b) はスクリーンに投影されるピンポイントにおける代表的な配光パターン図。

【図 2 1】

図 1 5、1 6 の前照灯による所定のロービームの配光パターン図（等照度曲線図）。

【図 2 2】

図 1 5、1 6 に示すレンズ 5 と図 2 0 (a) に示すリフレクタ 6 の反射面 7 の反射面ブロック 2 7 とにより得られる配光パターンであって、コンピュータのシミュレーションで得られた配光パターンを簡略化した配光パターンの説明図。

【図 2 3】

図 1 5、1 6 に示すレンズ 5 と図 2 0 (a) に示すリフレクタ 6 の反射面 7 の反射面ブロック 2 8 とにより得られる配光パターンであって、コンピュータのシミュレーションで得られた配光パターンを簡略化した配光パターンの説明図。

【図 2 4】

図 1 5、1 6 に示すレンズ 5 と図 2 0 (a) に示すリフレクタ 6 の反射面 7 の反射面ブロック 2 9 とにより得られる配光パターンであって、コンピュータのシミュレーションで得られた配光パターンを簡略化した配光パターンの説明図。

【図 2 5】

図 1 5、1 6 に示すレンズ 5 と図 2 0 (a) に示すリフレクタ 6 の反射面 7 の反射面ブロック 3 0 とにより得られる配光パターンであって、コンピュータのシミュレーションで得られた配光パターンを簡略化した配光パターンの説明図。

【図 2 6】

図 1 5、1 6 に示すレンズ 5 と図 2 0 (a) に示すリフレクタ 6 の反射面 7 の反射面ブロック 3 1 とにより得られる配光パターンであって、コンピュータのシ

ユミレーションで得られた配光パターンを簡略化した配光パターンの説明図。

【図 2 7】

図 1 5、1 6 に示すレンズ 5 と図 2 0 (a) に示すリフレクタ 6 の反射面 7 の反射面ブロック 3 2 とにより得られる配光パターンであって、コンピュータのシミュレーションで得られた配光パターンを簡略化した配光パターンの説明図。

【図 2 8】

図 1 5、1 6 に示すレンズ 5 と図 2 0 (a) に示すリフレクタ 6 の反射面 7 の反射面ブロック 3 3 とにより得られる配光パターンであって、コンピュータのシミュレーションで得られた配光パターンを簡略化した配光パターンの説明図。

【図 2 9】

図 1 又は図 1 5 のレンズの凸形状の変形例を示す断面図。

【図 3 0】

平レンズを使用した従来の前照灯の概略縦断面図。

【図 3 1】

図 2 0 のリフレクタの表面図。

【図 3 2】

所定のロービームの配光パターン図（等照度曲線図）。

【図 3 3】

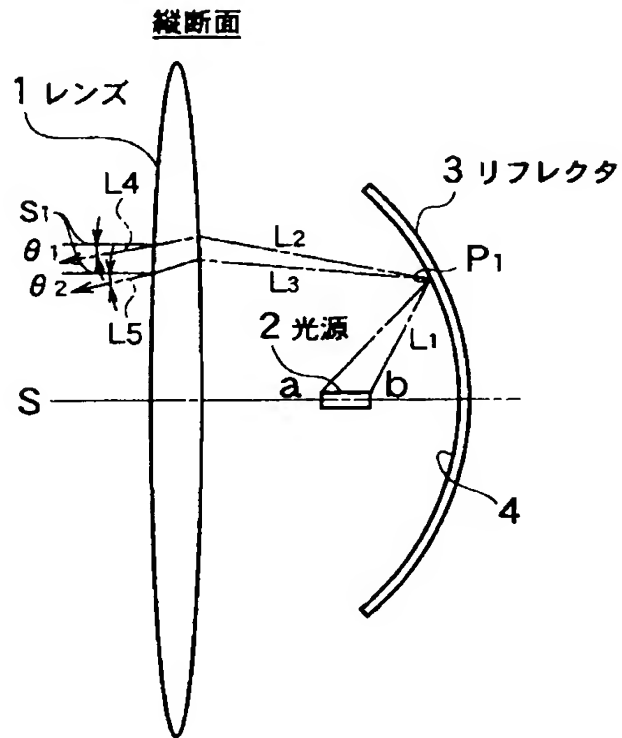
(A) ～ (F) は、図 1 6 に示す平レンズと図 1 6、1 7 に示すリフレクタの反射面の反射面ブロックとにより得られる配光パターンであって、コンピュータのシミュレーションで得られた配光パターンを簡略化した配光パターンの説明図。

【符号の説明】

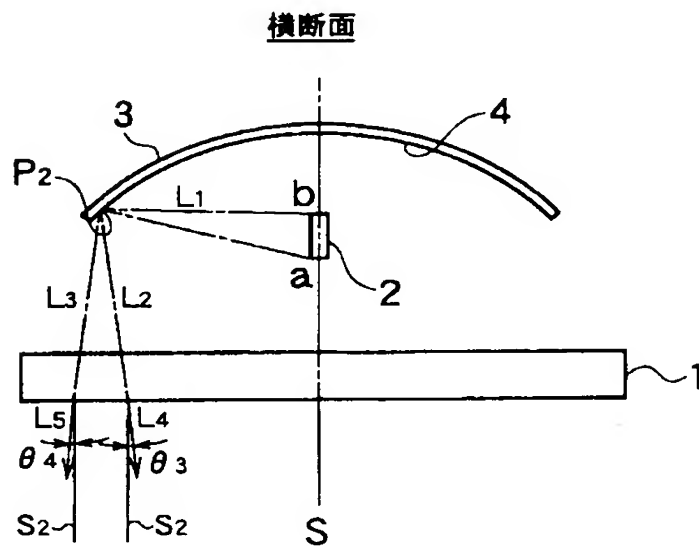
- 1、5    レンズ
- 2    光源
- 3、6    リフレクタ
- 4、7    反射面
- S    光軸

【書類名】 図面

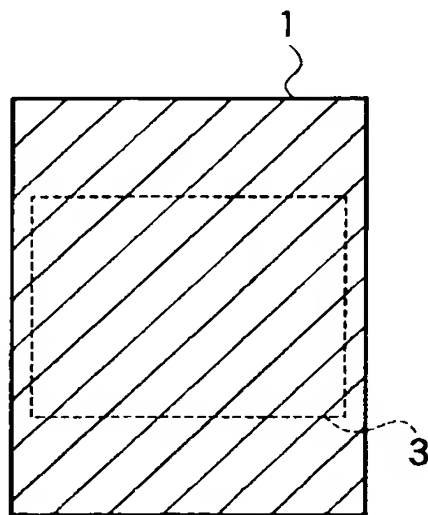
【図 1】



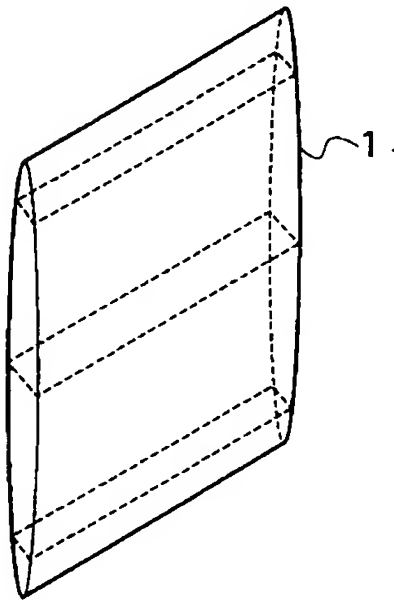
【図 2】



【図 3】

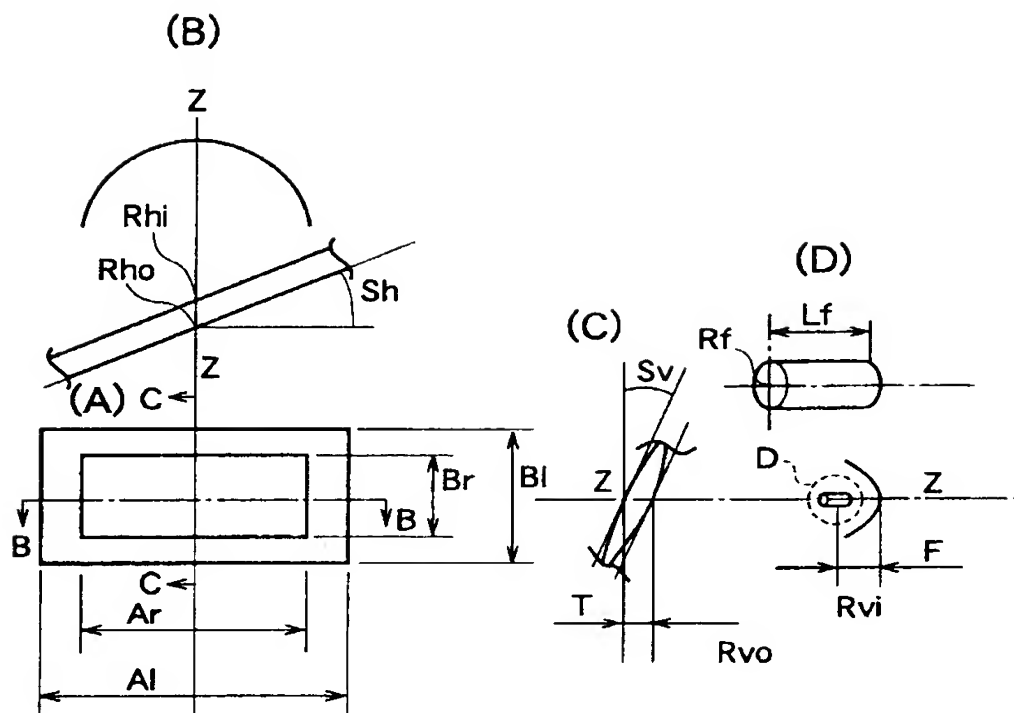


【図 4】

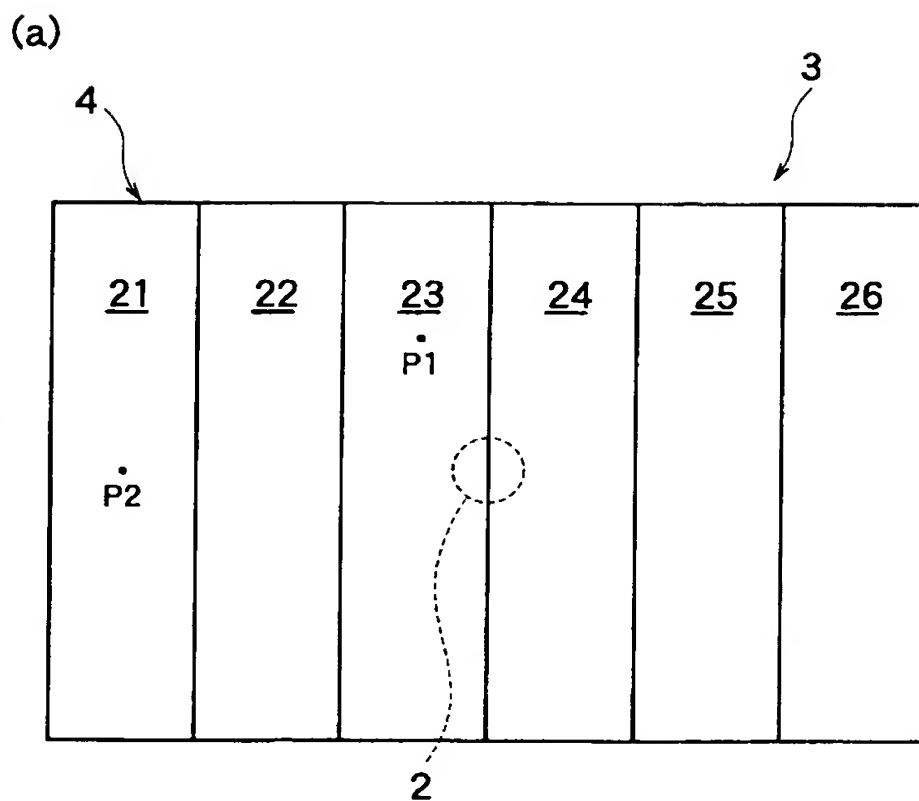




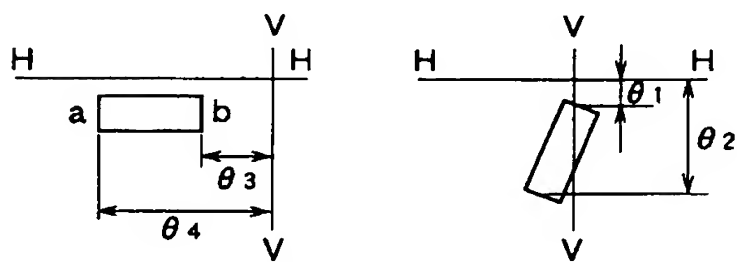
【図 5】



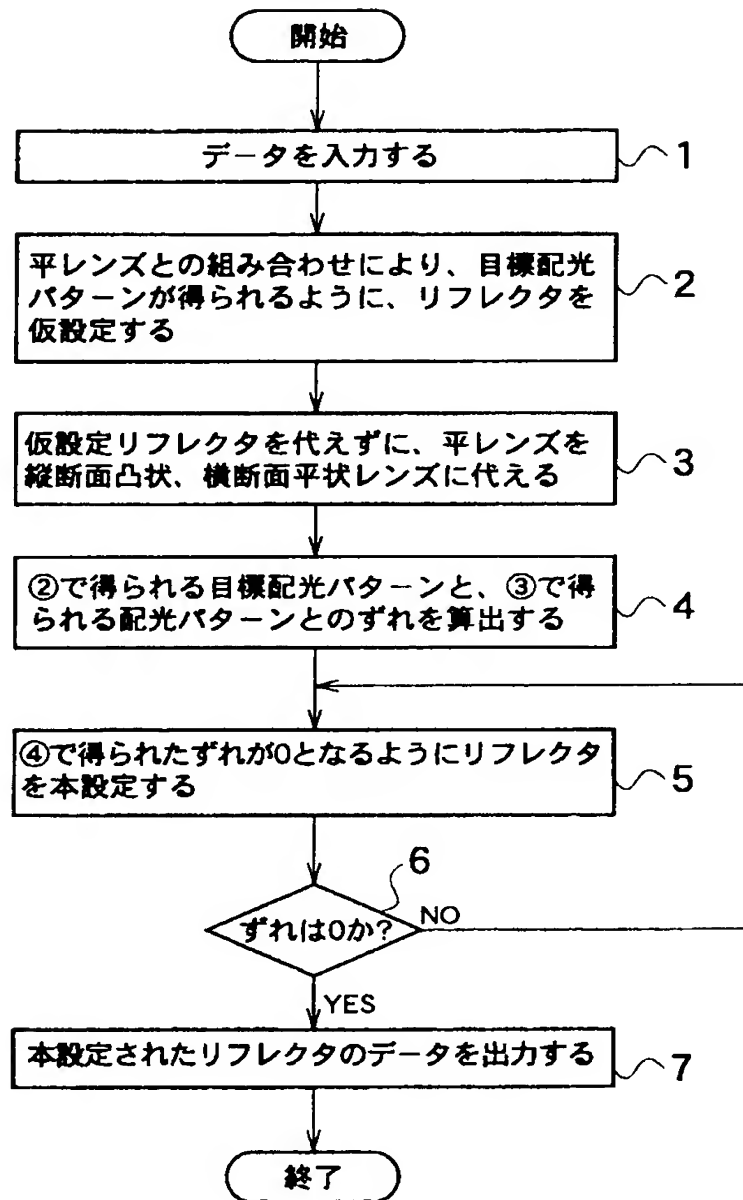
【図 6】



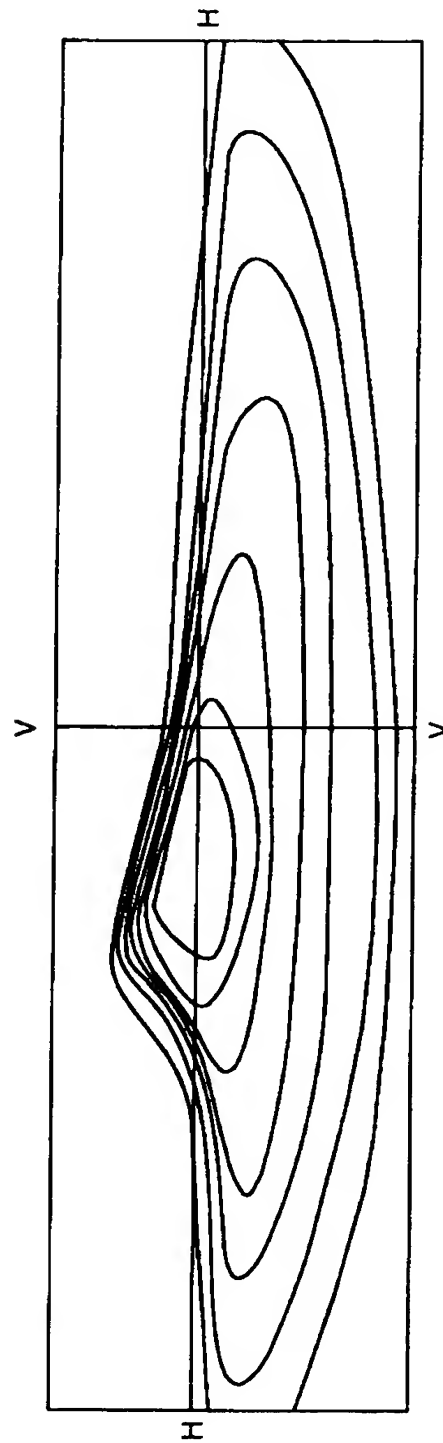
(b)



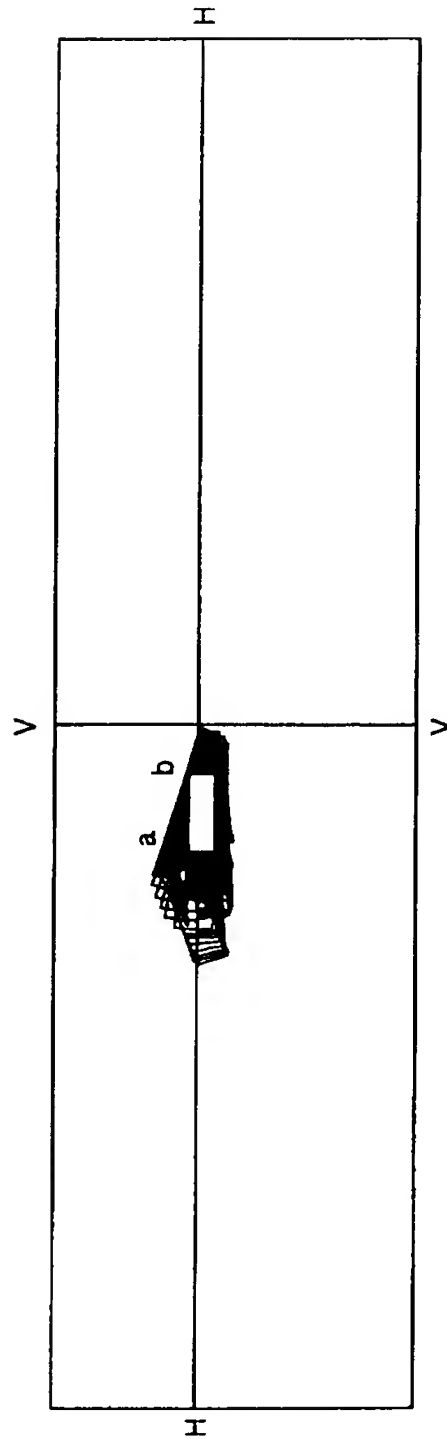
【図 7】



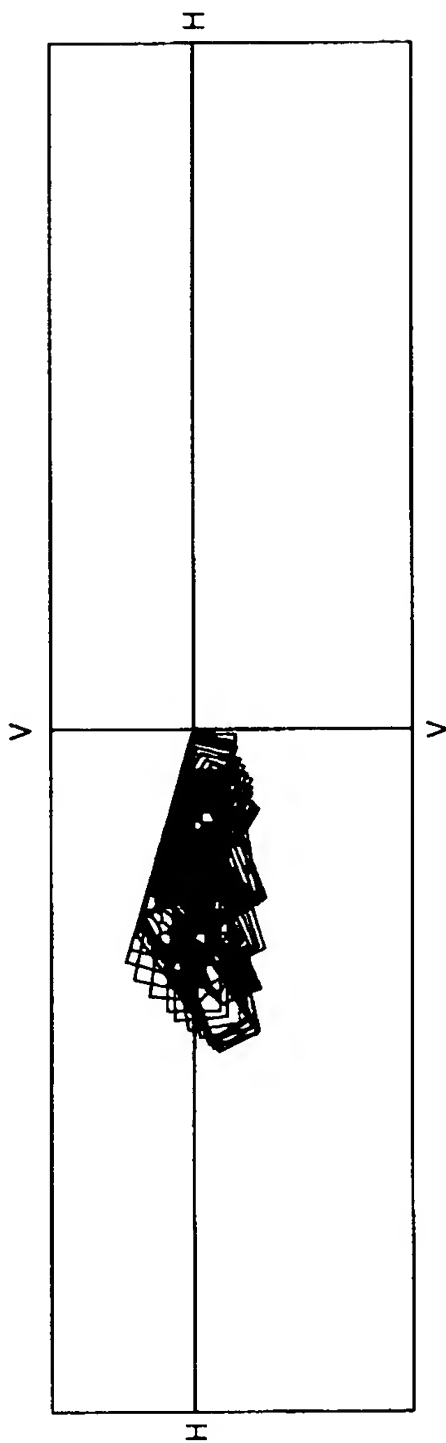
【図 8】



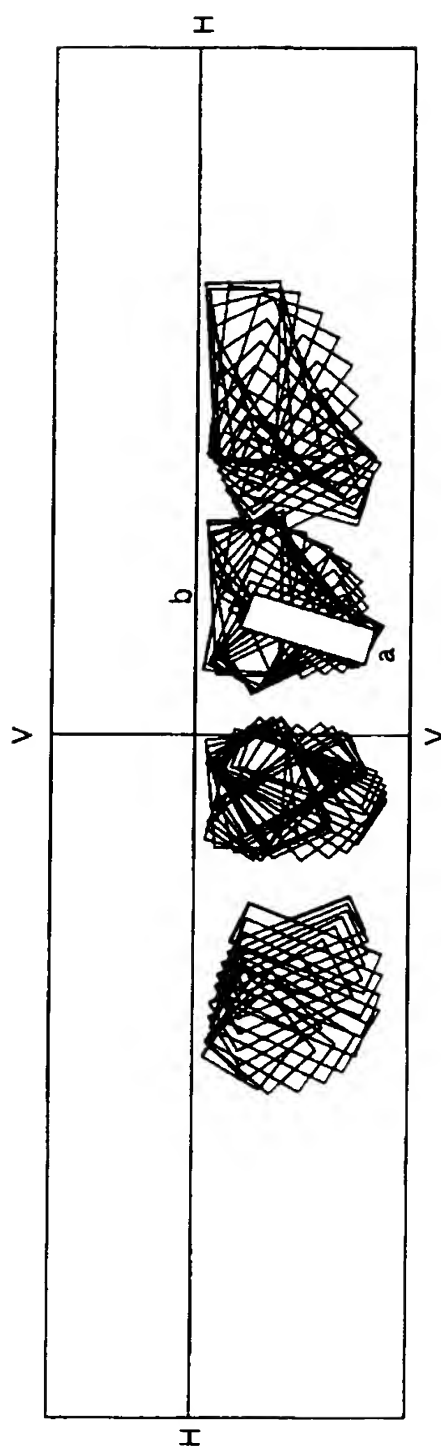
【図 9】



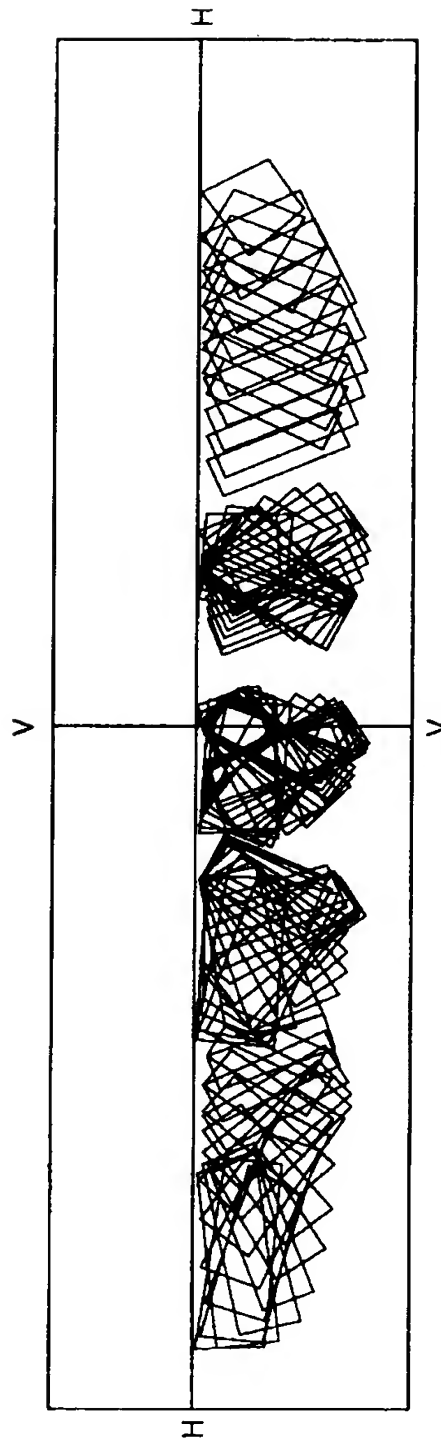
【図 1 0】



【図 1 1】

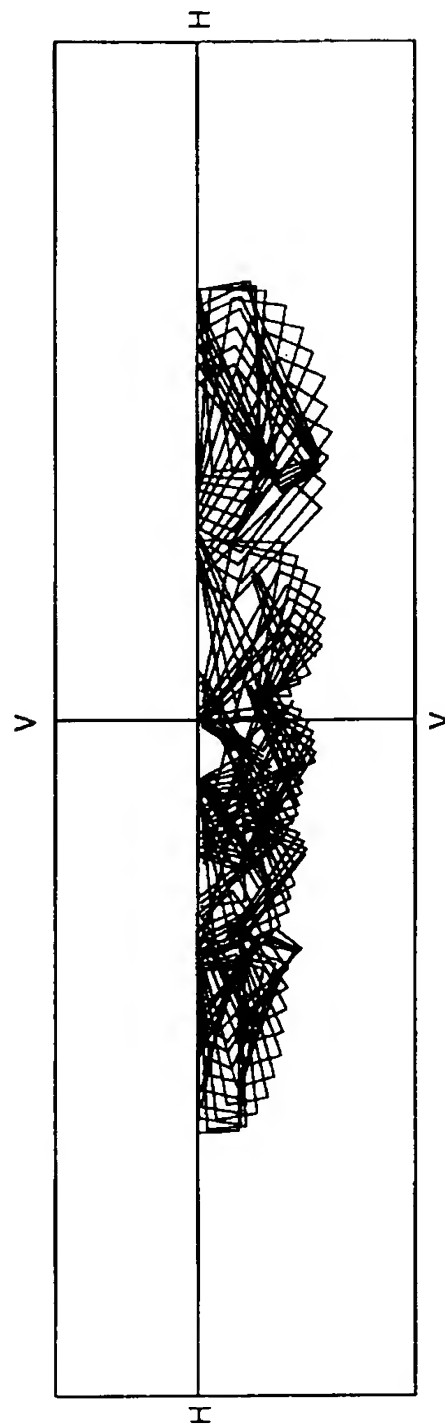


【図 1 2】

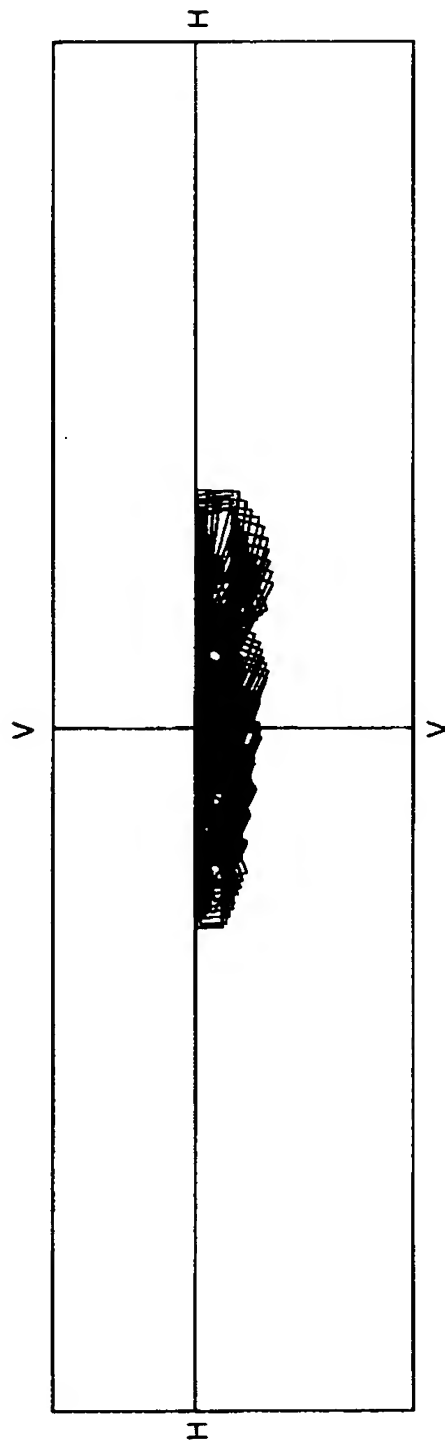




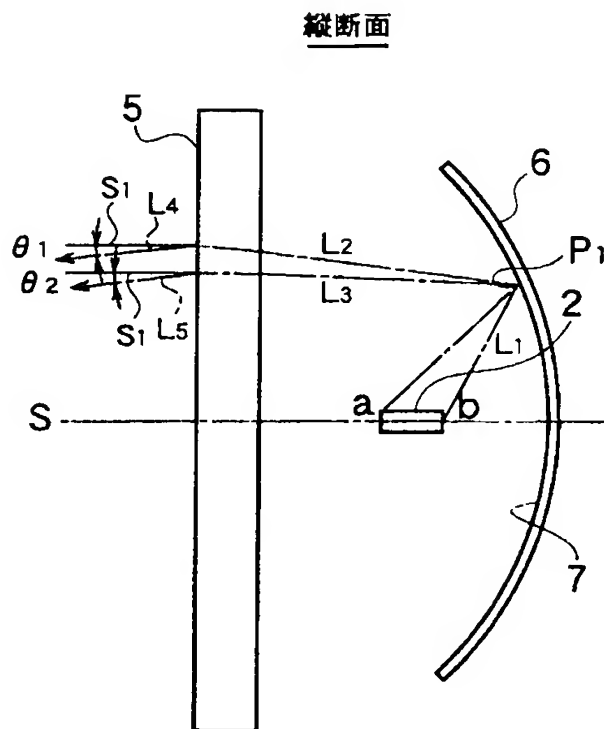
【図 1 3】



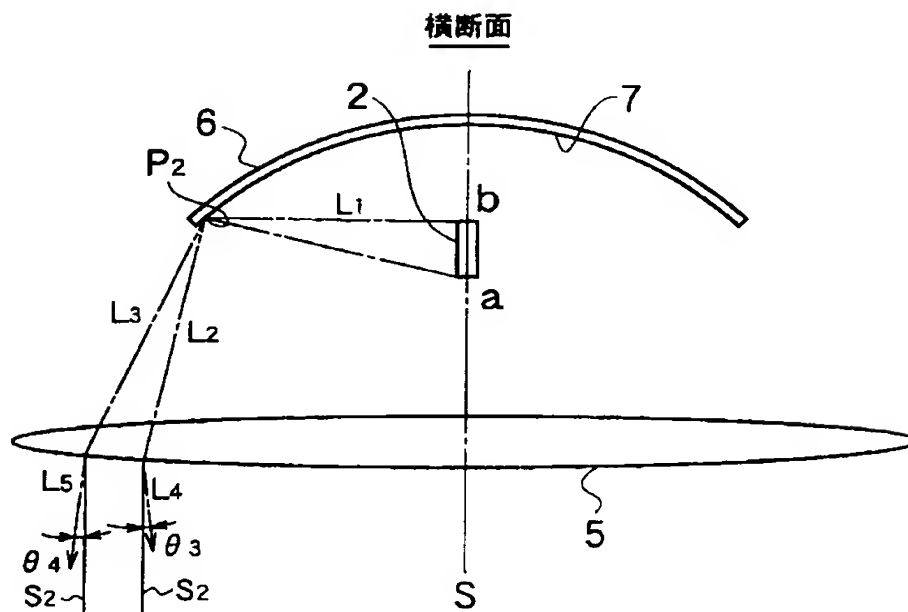
【図 1 4】



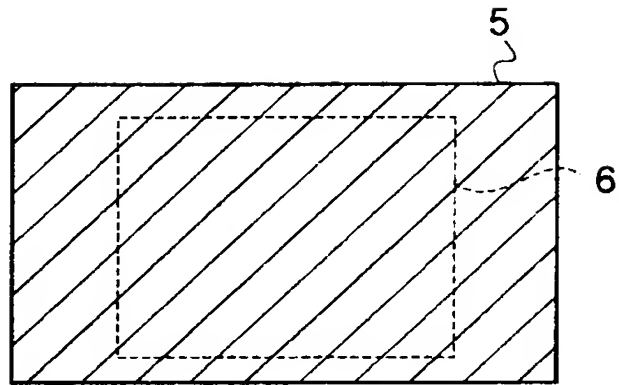
【図 15】



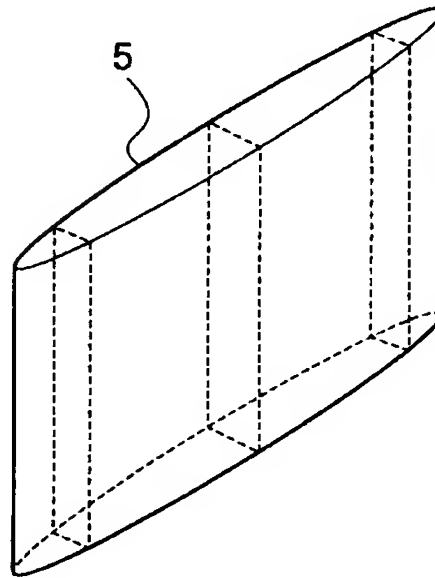
【図 16】



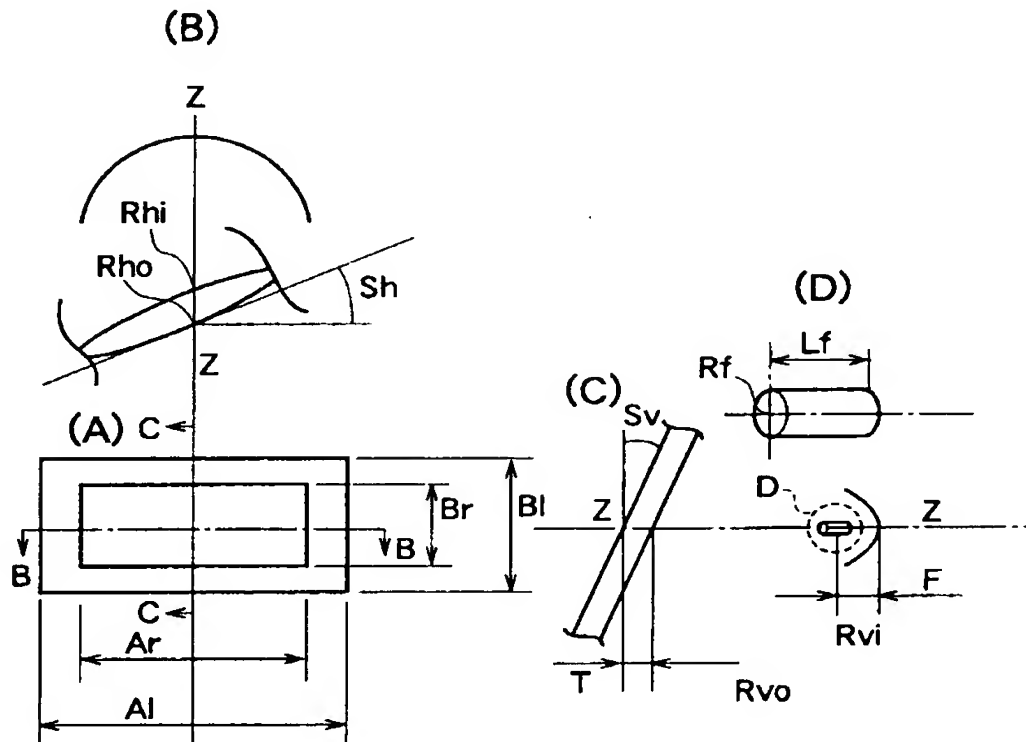
【図 1 7】



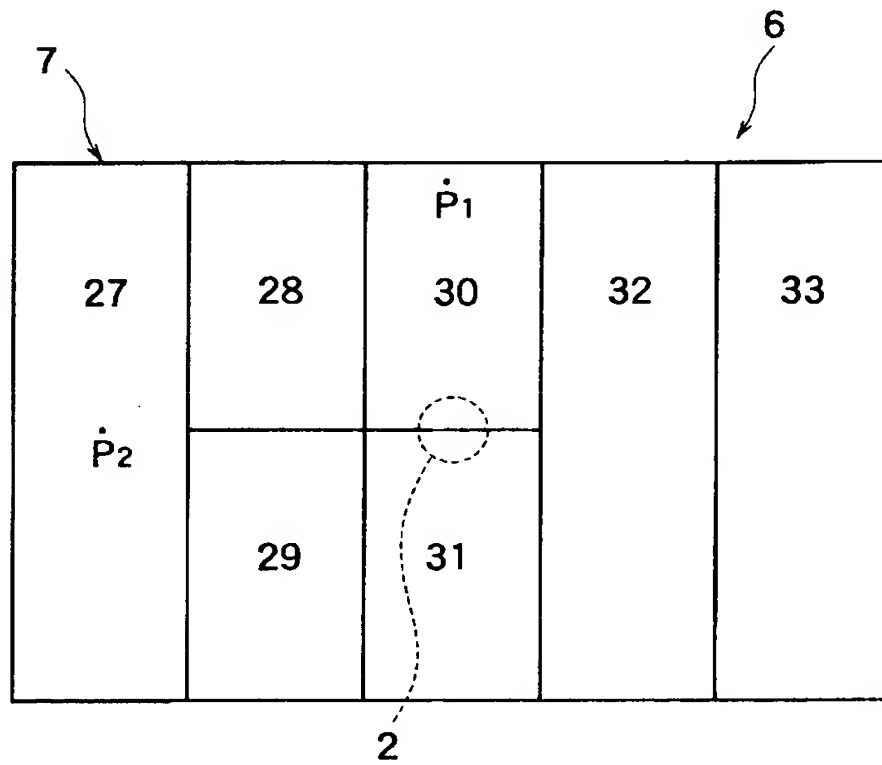
【図 1 8】



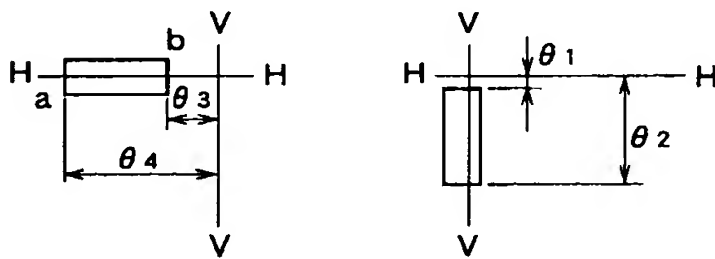
【図 19】



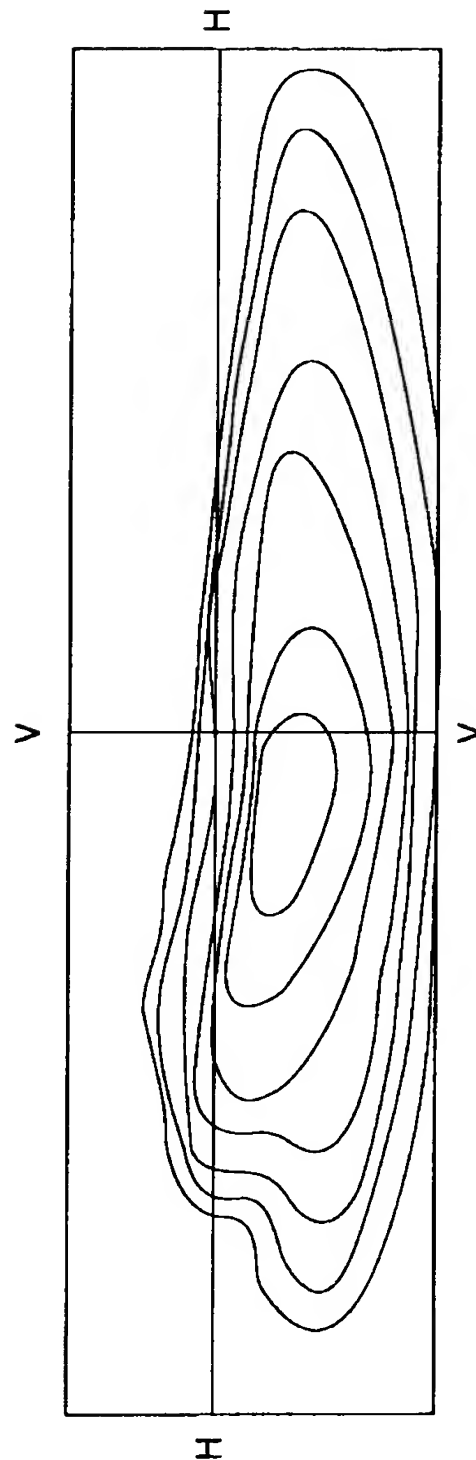
【図 2 0】



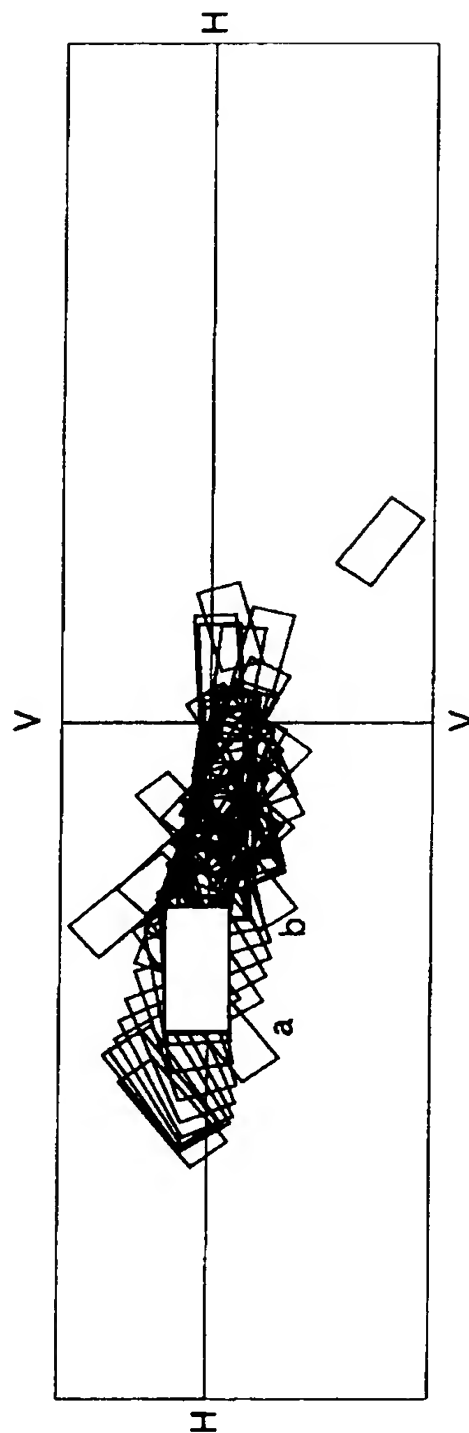
(b)



【図 2 1】

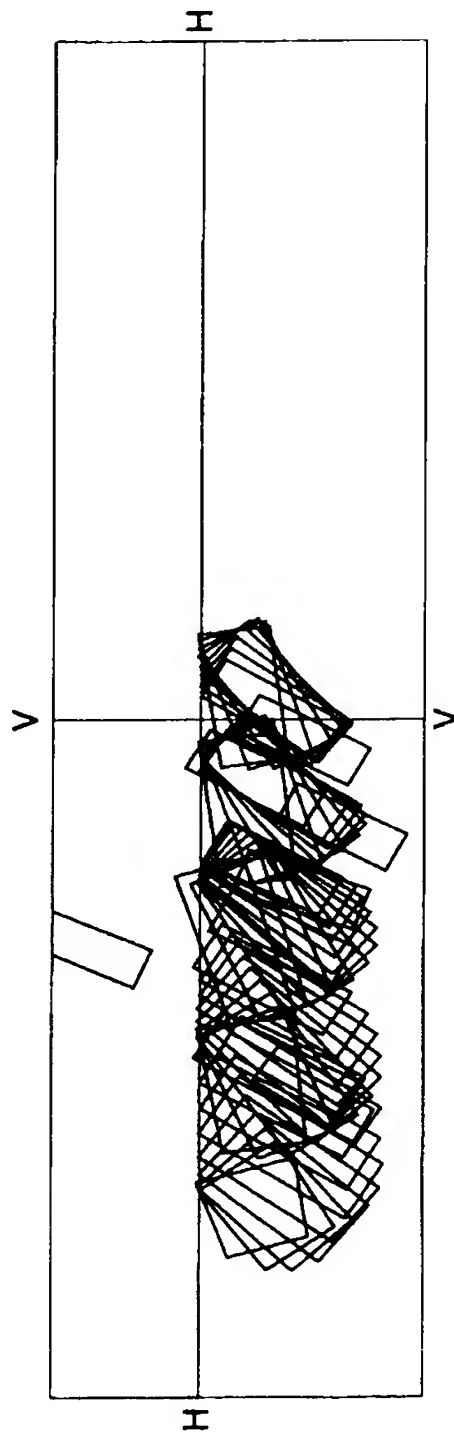


【図 2 2】

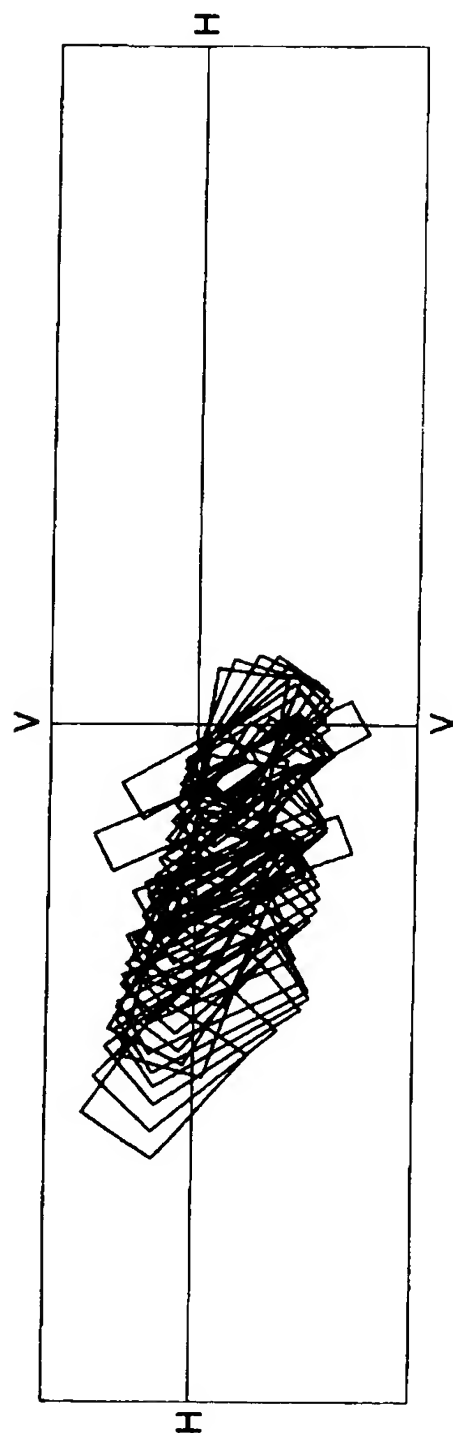




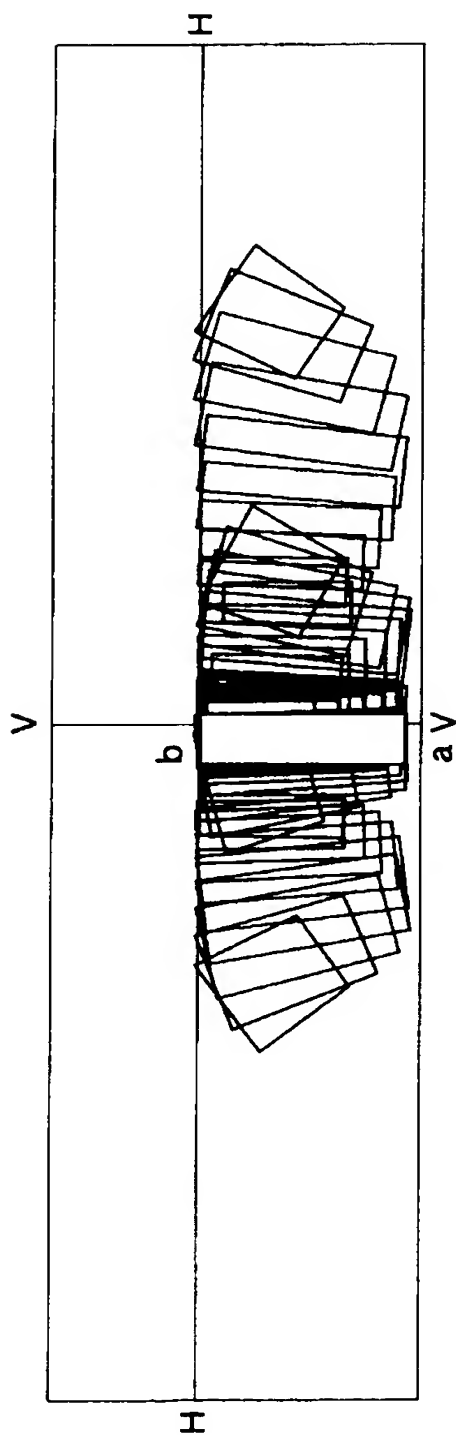
【図 2 3】



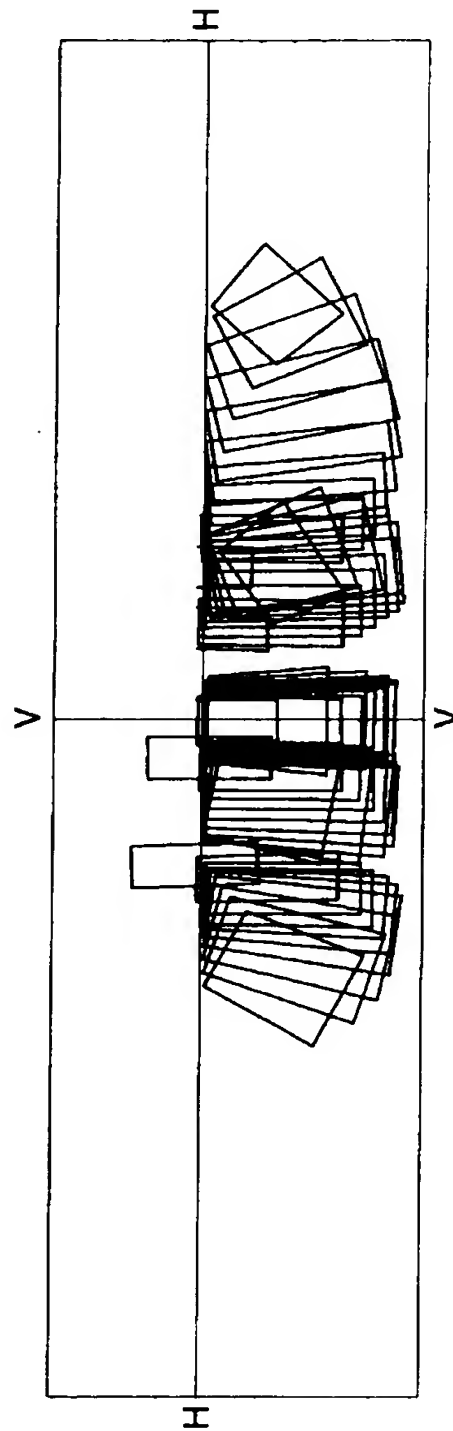
【図 2 4】



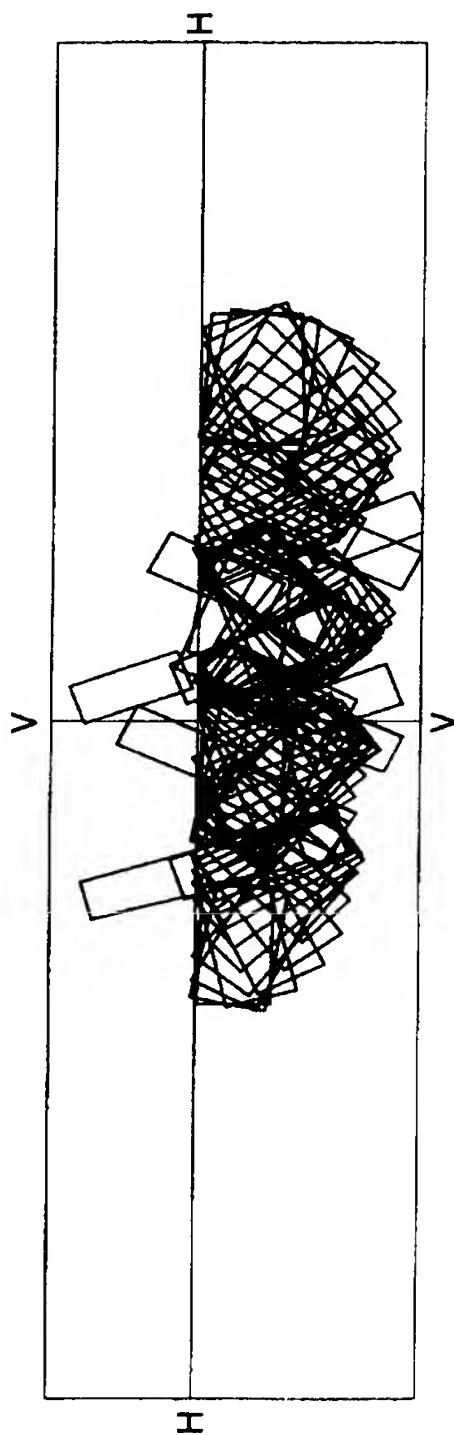
【図 2 5】



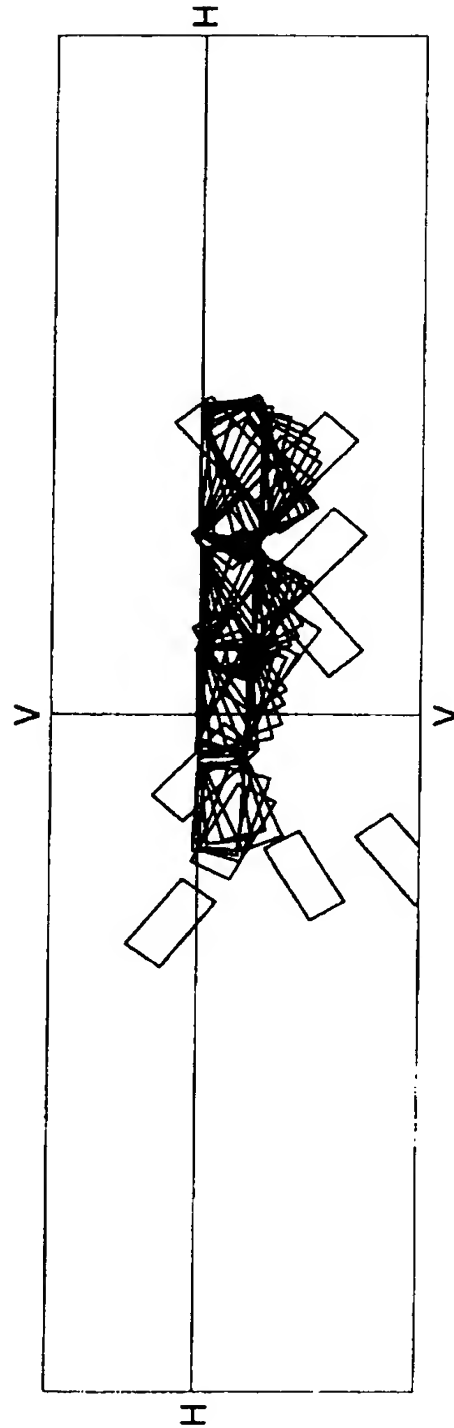
【図 2 6】



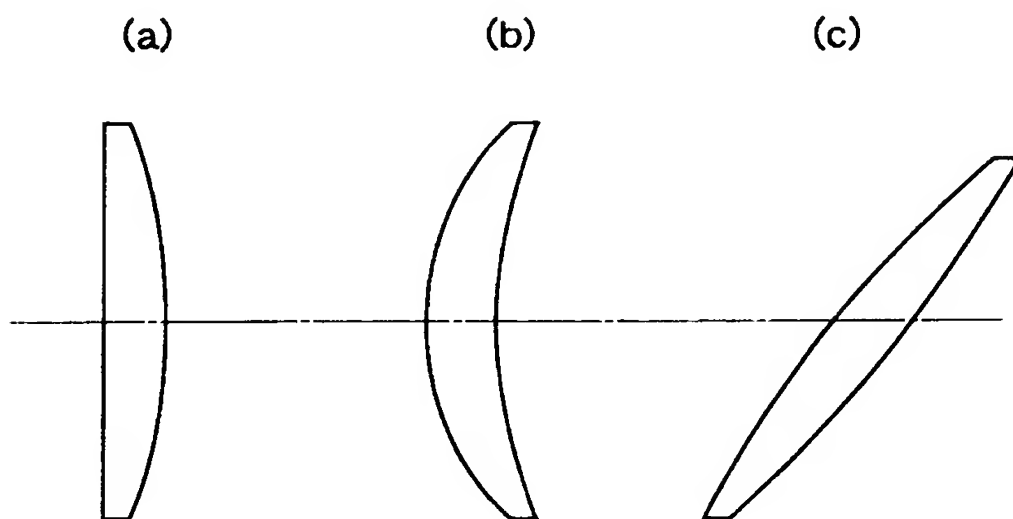
【図 2 7】



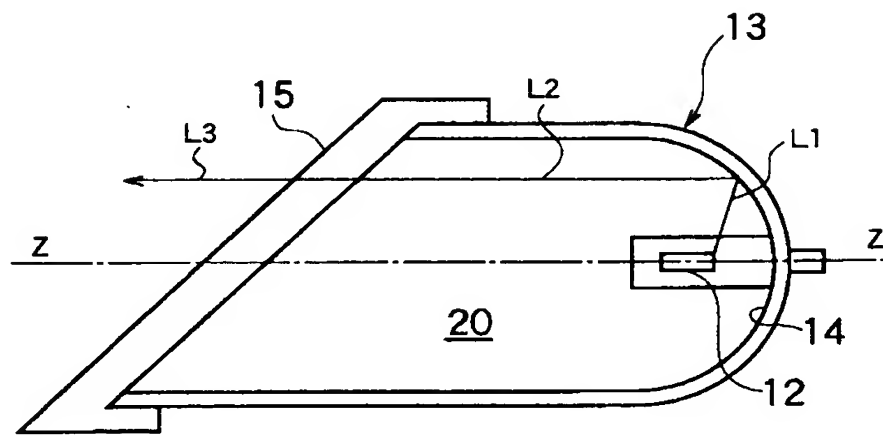
【図28】



【図 2 9】

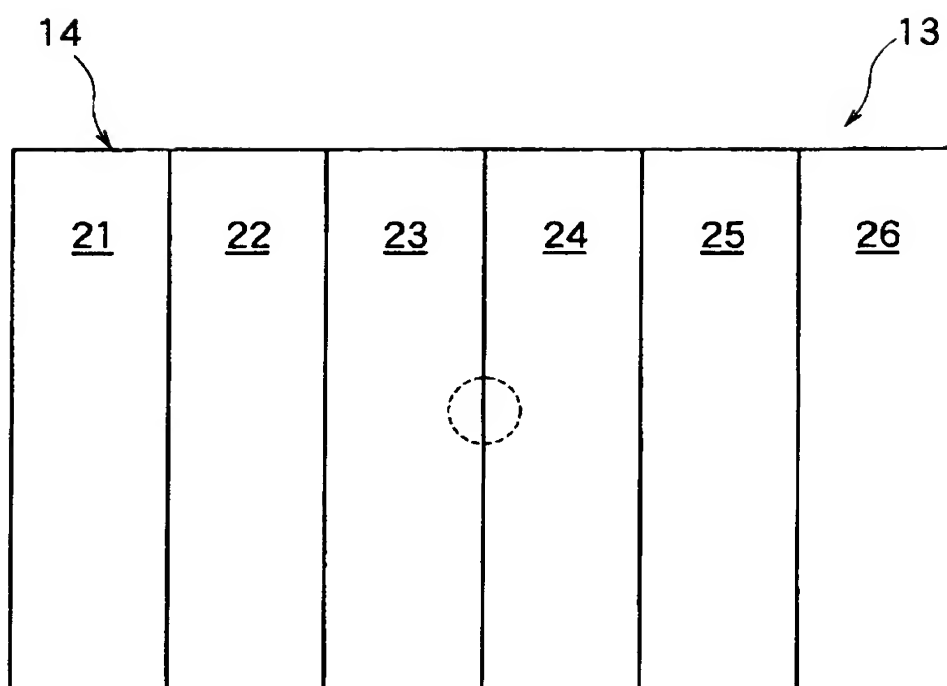


【図 3 0】

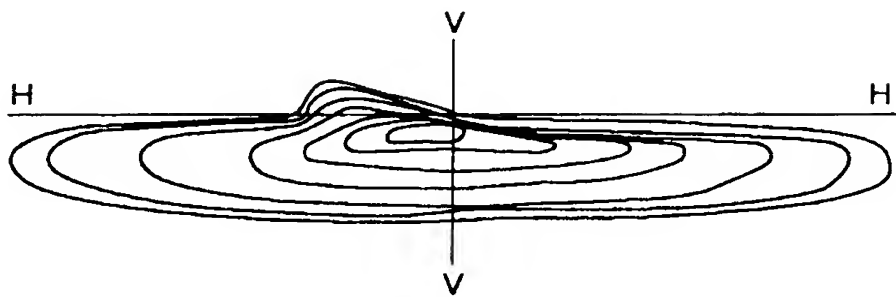




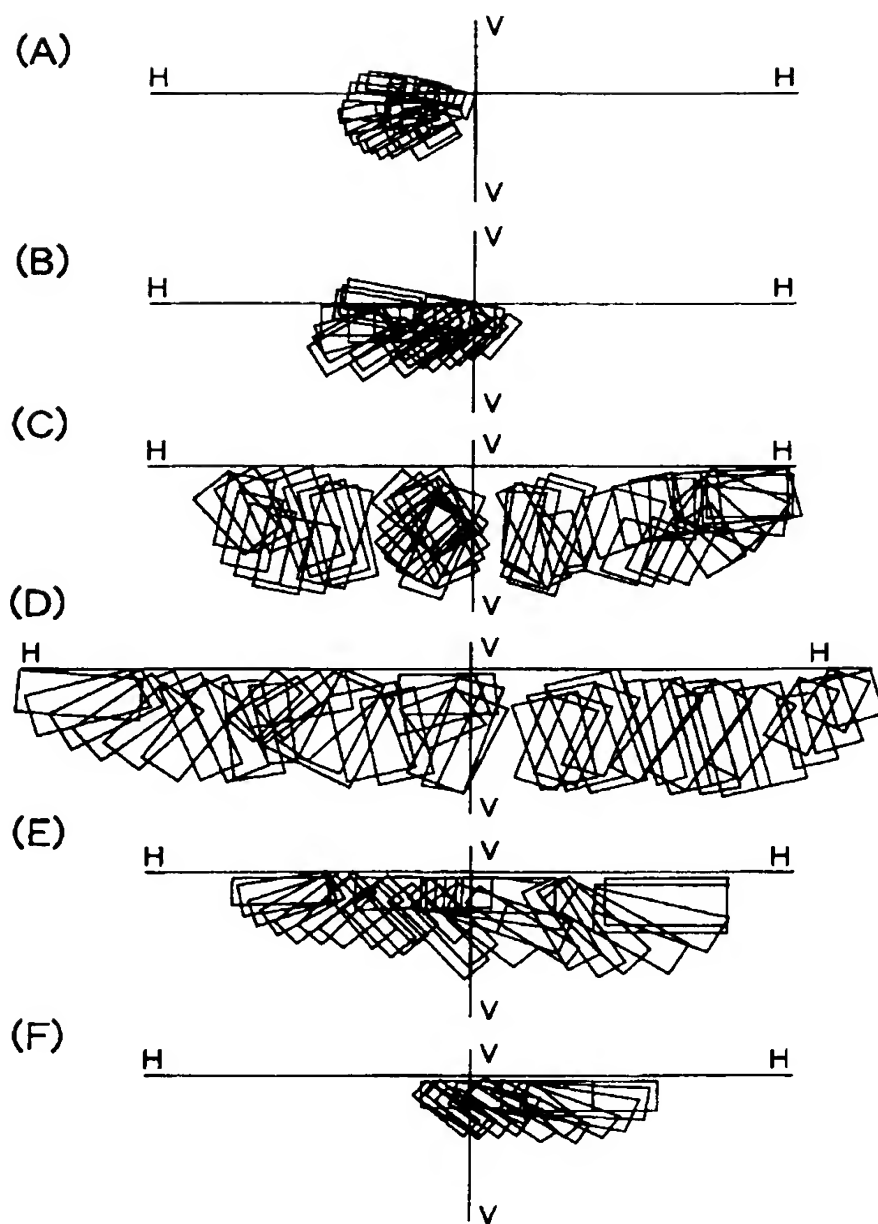
【図 3 1】



【図 3 2】



【図 33】



【書類名】            要約書

【要約】

【課題】    レンズ形状を変更することにより、内部をある程度見づらくすると共に新たな機能を有する車両用前照灯を提供する。

【解決手段】    レンズ1の縦断面が凸形状で、レンズ1により内部が見づらくなるため、リフレクタ3の仕上げ作業が簡略になる。また、縦に長く横に小さい前照灯が得られるため、十分な横寸法の設置スペースを確保できないような車体デザインの場合に好適である。

【選択図】            図1

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [000000136]

1. 変更年月日 1990年 8月30日

[変更理由] 新規登録

住 所 東京都品川区東五反田5丁目10番18号

氏 名 市光工業株式会社